
『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

ライガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

【Nコード】

N5250Y

【作者名】

ライガ

【あらすじ】

絶命した楔ちゃんが明久に憑依した……という妄想を詰め込みました。更新不定期。よろしくお願いします。

「……は？」（前書き）

バカテスト・化学

第一問

以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例…ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例…』 『オリハルコンとか言う伝説の金属を使えば』 『攻撃力の問題も解決すると』 『僕個人としては思いますけどね』

教師のコメント

二次元と三次元の区別はしっかりしましょう。そして攻撃力が問題ではありません。

「……は？」

人はみんな
自分は死なないと
思っている

いつか命が
尽きることを
頭では理解していても

それは今日や明日じゃ
ないと思っている

だけど死ぬ

今日も死ぬし明日も死ぬ

事件で事故で
病で偶然で

寿命で不注意で
裏切りで信条で
愚かさで賢さで

いつだって
みんな死んでいく

そんな中
女の子のために
死ねる僕は

残念ながら
幸せだ。

人はみんな
自分は殺さないと
思っている

殺人事件が

連日連夜報道されようと

それを

人生とは無関係な

ドラマと同じように

眺めている

だけと殺す

人は人を殺す――

何があるうと殺す

恋愛感情で損得勘定で

戦争で平和で

車で食事で

うっかりで甘やかして

漫画の影響で勘違いで

いつだって

人は人を殺してきた

友達のために殺すのなら
少しかだけ許される気も
するけれど

それもきつと
勘違いなのだろう。

覚悟は決めた。

か弱き者を守るためなら――

この命さえ、惜しまないと。

「……………ところで宗像くん。「先に動いたほうの方が負ける」って例の言説、信じる？」

「……………」

「漫画じゃよく見る台詞だけど、現実的にはどうなのかなあ。普通に考えたら先に動いたほうが勝つよねえ」

「だったら試しに先に動いてみたらどうだい？漫画好きの球磨川くん」

切り傷や銃創が目立つ、学園の廊下。二人は覚悟の印に上着を脱ぎ捨て、自分の個性を捨て、余計な武器は捨て、命と名誉さえ捨てる。

球磨川楔。女の子のために命さえ惜しまない、マイナス過負荷の筆頭。

宗像形。友達のために人生さえ惜しまない、アブノーマル異常の悪魔。

彼らを見て、人は何を思うのだろうか。

「えー？先に動いていいのー？あーでも折角のお勧めだけどさすがに気が引けるかな」

饒舌に喋るのは球磨川楔。脱いだ上着の下は廊下の壁にあるように銃創がくつきりと浮かび上がり、瀕死と呼べるほどの血に濡れている。

自分の死期を悟った男である。

「ここは公平にいち、にの、さんで動こうよ」

寡黙に目を細めるのは宗像形。彼の周りには武装していたあらゆる武器が散乱しており、殺人のために身軽さを身につけている。

自分の潔白を汚した男である。

「いいかい？ カウントダウンいくよ？——いち、」

二人は動かない。真っ向から静かに対峙する二人を見守るように、廊下の傷痕は戦いの行方を眺める。

次の瞬間。

「にの！」

二人が動いた。

ゴウッ！！という疾風の音が響き、不意打ちを企んで取り出した螺子で放った攻撃は、惜しくも宗像形の額を掠る程度に留まる。

なぜなら、球磨川楔だけに限らず、同じく宗像形も動いたからだ。

奇襲の失敗。その代償は己の命。宗像形の繰り出した手刀は球磨川楔の首を確実に貫き、致命傷を与えた。

「がっ……ふっ!!はっ……」

「瞬殺。なるほど、真黒くんの言ってた通りだ。武器をすべて捨てたほうが軽くなって殺しやすい。そして生まれて初めて人を殺した」

運命が変わることはなかった。

死期を悟った男は死に、潔白を汚した男は後戻りもままならなくなつた。

強い意思を宿していた宗像形の瞳が、急速に崩れ去る。無限の殺意を持った男に残ったのは、

「けれど、意外とつまらないぞ殺人^{これ}……」

過去の自分への疑問と、虚無感だった。

「いつ……いやああああっ!!みつ、楔ちゃああんっ!!」

戦いを終えて役目を果たした戦場に、甲高い悲鳴が響き渡る。喜界島もがな。球磨川楔が命を懸けて守り抜いた女の子。

（あーよかった……）

意識が薄れていく中、確かに感じた。

「」

唇に、自分の守り抜いた——温もりを。

（あは……こりゃ役得だ、なあ）

そこで、糸が途切れるように。

球磨川楔の意識は暗転した。

「……………」

目が覚める。覚めることができる。まず最初に思ったのは、そんなごくごく平凡なこと。

「あら、目が覚めたのね」

上体を起こして自分の状態を確認——することはできなかった。途方もない脱力感が体と意識の両方を襲い、どうしても起き上がることができない。

体中の質感と薬品の香りから、どうやらここは保健室のベッドのようだ。そういえばこの間見たナースもののエロ本は微妙だったな、とどうでもいいことを考える。

「具合のほうは大丈夫？気分は悪くない？」

自分の顔を覗き込んでくるのは、まるで初対面の相手だった。白衣を着ている辺り、保健医なのだろうが……本当に見たことがない。もう一度よく見よう、あわよくば唇でも奪ってやろうと上体を起こそうと再び試みる。

「ダメよ、起き上がっちゃ。いきなり倒れたんだから、ちゃんと休養は取らないと」

「……は？いきなり倒れた？」

「ええ、振り分け試験でね。残念だけど、Fクラスになっちゃうわね……この学園、そういうことは厳しいみたいだし……」

頭の上に疑問符が浮かび上がると同時に、体中に違和感が訪れる。

まるで——自分の体ではないような感覚が。さながら、身に覚えのない衣服を知らない内に着ていたように。自分の体に——まるで記憶がない。

「とにかく、まだもう少し寝ていてね。」

——吉井くん」

「……………」

首を動かして状況の把握に取り掛かる。その目が捉えたのは、洗面所の鏡に映る自分の姿。

黒髪ではなく、茶髪。

瞳の色も、黒から茶色へ。

顔の形は、童顔という言葉がよく似合う——ちょっとバカっぽさが目立つ顔立ち。

自分の顔ではなく、他人の顔なのは明白。そしてその他人の顔の持ち主が、自分であることも。

「……………あつれえええええつ!？」

4月。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎えるための桜が咲き誇っている。まさしく満開という言葉がよく似合うような、桃色の花弁を花開かせて、その桜達は新たな門出に立った生徒を歓迎していた。

風にさらわれた桜は紙吹雪を彷彿とさせる。誰もがその光景を見て目を奪われる中、その男子生徒は散った桜しかないであろう地面に顔を向けたまま、いわゆる俯いた状態でブツブツと愚痴をこぼしていた。

「『あーあ意味わかんない』『これまさか安心院さんの仕業?』『まったくやつてられないや』」

吉井明久。

道が桜の花で覆われる中、一人だらだと歩く。その様子は夢と希望に溢れた新入生のものではない。そもそも、彼が夢や希望などという真つ当な感情など抱く訳もない。

彼は正真正銘——過^{マイナス}負荷という人種なのである。

「『しかもなんだよあれ？』『家にある食べ物が割り箸だけってどういうこと？』『驚きのあまり』『美味しく頂いちゃったよ』」

吉井明久。

彼の名前はそういうことになっているが——正しく言えば少し違う。元々、吉井明久という人間はこんな括弧付けた喋り方はしないし、愚痴を垂らす程何かに悩むような頭のいい人間ではない。どちらかと言えば、百人中百人がバカと答えるような人間なのだ。

そう。彼の本当の名前を、この世界で知る者は誰もいない。

また。彼の本当の名前が、この世界で知られることはない。

そして。彼の本当の名前は——

「『まあいいや。』『真人間を目指す僕にとっちゃ』『0からのスタートってのもなかなか悪くないぜ』」

球磨川楔。

桜並木の続いていた道の終わり、その学園の前に彼は立ち。

彼の文月学園での第二の人生が、幕を開けた。

「……やりにくいなあ」（前書き）

バカテスト・国語

第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

- （１）弘法も筆の誤り
（２）泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- （１）弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『（１）ツンデレの失敗料理』
- 『（２）涙目で裸エプロン』

教師のコメント

とりあえず言いたいことは、（１）はともかく（２）は犯罪臭がします。

「……やりにくいなあ」

「吉井。遅刻だぞ」

「『……………』」

校門を抜けた明久を呼び止めたのは、筋骨隆々という言葉をそのまま擬人化したような男のドスの効いた声だった。傍らには空っぽの段ボール箱を持ち、表情からはやれやれ、という感情が伝わってくるような呆れの顔。

彼の名前は西村宗一。補習室の鉄人とも呼ばれる、文月学園の生徒から最も恐れられている存在である。だが、明久はその脇をさつさと通り抜け、まるで無視するような形で生徒玄関を目指した。

それも仕方がないといえば仕方がないことだ。なにせ、彼は^裸この世界で知り合いいはない。知り合いとは、互いに『知り合う』からこそその関係が成り立つのだ。今の彼は、誰のことも知らない、しかし自分のことを知っている人間はいるという一方的な立ち位置にいた。それに、吉井という名前を呼ばれても、それは自分の名前ではない。故に、明久が西村教諭の言葉に気づかなかったのも、自分の名前に呼び慣れていないのも無理はなかった。

「吉井！お前のことだ！」

「『……あ、僕か。』『何か用ですか？』」

「教師を無視するとはどういっつもりだ、まったく」

「『あははすいません』『ちょっとうつかりしましたー』」

「お前はうつかりで自分の名前を忘れるのか……」

少し不機嫌になった西村教諭の顔が再びやれやれという表情に逆戻りする。ここでぼんやりとしていた、ではなく自分の名前を忘れた、と思われるのが吉井明久という人間だった。千人中千人がバカと豪語する人間なのである。

「まあいい……それより、体調のほうは大丈夫なのか？」

「『体調？』『見ての通り最悪ですが』」

「そうか、元気そうだなによりだ。実は、俺はお前が倒れたと聞いて……『吉井はバカだったんじゃないかったのか？』と思ったんだ」

ひどい言われようだった。

「『あははー何か』『さりげなく罵倒された気がしますけど、』
『まあそうですね。バカは風邪を引かない』『とか言いますし。』
『まあバカだから』『風邪を引くとも言いますけどね』」

「そうだな……。吉井なら、それすらも超越したバカだと思ってい
たんだが……。すまない。俺の勘違いだったようだ」

「『ねえアンタ本当に教師？』『そろそろ聞き流すのも難しくなっ
てきたぜ？』」

今までの吉井という人物に興味が隠せない明久（稜）だった。

「む、話が長くなってしまったな。自分のクラスは知っているだろ
う？急いで行け」

「『ああ、Fクラスでしたっけ』『了解です』」

話に区切りがつき、明久が校舎へ向かって再び歩き出す。それを見
送る西村教諭は、全身を包む違和感を感じ取っていた。

「……まだ調子が悪いのか？」

彼の名前は球磨川楔。

いずれこの学園を掻き乱すこととなる、世界の異物^{マイナス}である。

「『2・F、2・F……』 あ、ここか 『よし帰ろう』」

自分の下駄箱を見つけるのに一苦労、自分のクラスを見つけるのにまた一苦労して自分のクラスの前に辿り着いた明久。だが、早速帰りたいという衝動に駆られた。

それというのも、全ての元凶は目の前にある教室の惨状である。机ではなくちゃぶ台（傷だらけ）。椅子ではなく座布団（綿なし）。床には（腐った）畳。ホームレスご用達の設備だった。

「『これが格差社会ってやつかよ』『うっわどうしょ』『今すぐめだかちゃん呼びたくなってきたぜ』」

「ぐちぐち言っでないで早く座れ！このウジ虫野郎！」

今にも壊れそうな扉を開くと同時、容赦ない罵倒を浴びせられる明久。この世界の人間は罵倒なしで生きられないのかと思う程、若干どころか本気で帰りたくなった明久だが、彼の中で小さな火が灯されたように興味が沸いたことでなんとか踏み止まった。

明久が興味を持ったのは他でもない、この格差社会を如実に再現した学園にだ。きっと他にも楽しい娯楽があると、明久は考えたのだった。

「『いきなりウジ虫呼ばわりなんてひどいよ』『僕、すごく傷ついたんだけど』『そういう人の悪口はよくない。』『今すぐ謝れ！』『このゴリラ』」

「わかったわかった。早く席に——って待てや！今言っただろ！『ゴリラ』ってめっちゃくちゃ言っただろ！？」

「『そうだっけ？まあどうでもいいよ』『それより知ってる？』『ゴリラの正式名称ってゴリラ・ゴリラなんだぜ？』『ぶっ……』」

「それ今話す話題じゃねえだろ！？しかも最後笑ったか！？ぜってえ笑ったよな！？」

明久に第一印象でゴリラと呼ばれた男子生徒が勢いよく憤慨する。彼の名前は坂本雄二。このクラスの代表なのだが、どうやら教壇に立って教室を見回していたようだ。その馴れ馴れしい言動から、どうも吉井明久の知人のようである。

今にも取っ組み合いになりそうな感じで話を続ける二人だが、やがてそれは扉から入ってきた教師によって止められた。

「えー……席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

よれよれの背広に生きることになったような顔。どうやらこの最低クラスの担任のようだ。

「『はい』」

「ういーっす」

と、そこで明久はおや？と首を傾げる。さっきまであれだけ険悪だったのに、この男子生徒は大して気にしていない様子だったのが意外だったのだ。この吉井明久とは、恵まれている人間らしい。

「ん？なんだ明久？」

彼の視線に気づいた男子生徒が気軽に声をかけてくる。その様子に、明久は若干眩しそうな表情かおをしながら、

「『……いや、』で、名前なんだっけ？』『うっかり忘れちゃったよ』」

「……お前、やっぱり一回病院に行ったほうが……いや、現代科学じゃ無理か。坂本雄二、だろうが。思い出したか？」

やっぱり、にアクセントを置いた台詞に、明久は男子生徒の名前を小さく繰り返す。やがて視線は雄二に向き、とりあえず名前で呼んでみることにしようと結論づけた。

「『残念ながら思い出せないや』『一年間よろしく、雄二くん』」

「あいよ」

苦笑いをしながらヒラヒラと手を振る雄二。それを見て明久は、

（『……やりにくいなあ』）

ポリポリと頭を掻きながら、居心地悪く近くの座布団に腰を降ろすのだった。

「……やりにくいなあ」(後書き)

誤字脱字、感想、おかしい点などお待ちしています

「……それはどうかな?」(前書き)

バカテスト・英語

第三問

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「『大地の母、ブックシエル。レギュラー入り!』」

教師のコメント

野球ではありません。そしてgrandmotherとは祖母と訳します。

「…………それはどうかな？」

「えー…………このクラスの担任になりました、福原…………」

教壇に立つこのクラスの担任を名乗る人物が黒板のほうを振り返る。だが、そこにあるべきものがなく、一回転するように再びFクラスの生徒のほうへ向き直った。

「……………慎です。何か不備があれば申し出てください」

チョークすら用意されていないことに呆気に取られるクラス一同。そんな中、にこにことした表情を崩さずに元氣よく手を上げる生徒がいた。

明久だ。

「『はい先生』『座布団の綿がありません』」

「我慢してください」

「『はい先生』『窓が割れてて寒いでーす』」

「我慢してください」

「『はい先生』『ちやぶ台の脚が折れましたー』」

「我慢してください」

「『はい先生』『自称担任とか言う人がムカつきまーす』」

「我慢してください」

「『あははー』『お前NPCかこのやろっ』」

「では自己紹介をお願いします。じゃあ、窓際の人から」

「『……………』」

あまりのひどい扱いに明久はちよつとどころかなりブルーになった。イジイジと体操座りでケータイを弄り出す明久だが、とりあえず自己紹介は聞いておくかと窓際のほうに意識を向ける。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

（『ふむふむ、ジジイ調くんか』『キャラが強いね』）

「……………土屋康太」

（『ふむふむ、三点リーダーくんか』『キャラが強いね』）

「須川亮です。みんな……………恋にうつつを抜かす異端者を裁く、異端審問会に加入しないか？」

『『入会を表明しよう』『』』

「ふ……………友よ」

「『……………』」

「おい明久帰るにはまだ早いぞ」

「『離して雄二くん！』『僕こんなところでやってける気がしないよ！』」

鞆を抱えての脱走を雄二に止められ嫌々席に戻って再びケータイを弄り出す明久。そういえばさっきから男しかいないじゃないか……
と思考がネガティブになりながらも、そんな明久を置いて自己紹介は続く。

「島田美波です。ドイツからの帰国子女で、日本語の読み書きは苦手です」

やっと女の子だ！！と速効でケータイを放り投げて声のした方向を向く明久。向けた視線の先にはサラサラの髪をポニーテールに括り、整った顔立ち、スラリとした体躯の、いわゆる美少女がいた。

ほわー、と明久が目の保養にしていると、その美少女と目が合う。
『ジロジロ見すぎたかな？まあいいや透視できるまで見ていよう』
と、わりと無茶かつ失礼なことを思っていたところだった。なんと、目が合った美少女が手を振ってくるではないか。

（『おおおおお！』『すごいぜこれキタんじゃない！？』『マジでグッジョブ明久くん！』）

（（（チ……ッ！）））

中学生のように心をときめかせている明久を見てカッターナイフなどの文房具を取り出すクラスメイト。

「予想通り、バカばかりじゃのう……」

「……………これはひどい」

先ほどのキャラの強い二人のなかなか的を射た発言は誰の耳にも入ることはなかった。

「それで、よくウチを乱暴者と誤解してる人がいるみたいだけど……ウチは男の子に暴力振るったりしません。一年間、よろしくお願いね」

そう言って締め括り、すんと座布団に座る美少女改め美波。

そんな動作まで可愛らしく映るのだから不思議なものである。

「えー……じゃあ次、吉井くん、お願いします」

と、ついに明久の番がくる。自分の見る限り、周りにいるのは男ばかりで女子はさっきの美少女一人だ。先ほど手を振ってきたこともあり、自分の印象はきつと悪くないはずだ。クラスで唯一の女子というだけあって、明久はぜひともお近づきになりたいと思っていた。幸い、次の自己紹介は自分の番である。立派な好青年を演じて美少女とお近づきになると、不純な思考の下、明久は立ち上がった。

「『吉井明久です！仲良くしてやってくれと嬉しいかなっ』『それと、タイプの女性はあまり暴力を振らない人です！』」

「……………（ピクッ）」

「『あと、自分で言うのもなんだけど』『僕って結構惚れやすい性格です！』」

「……………（ビキビキ）」

そこでチラッと美波のほうへ振り向くと、あっちも明久のことを見ている。ものすごくいい笑顔だ。どうやらもう一押しだと考えた明久は、その一押しを実行することにした。

「『最後に、実は僕——』『ペッタンコが大好きでぎゃあああああ

あああああつー!!」

ドロップキックが飛んできた。

「前言撤回よ！ただし吉井明久は例外っー!!」

「『痛いよ!』『マウント取ってひたすらグーで殴るのやめて!』
『あと男子の夢を返してえっー!!』」

『異端審問会の諸君。君達は馬乗りにされている男子を見てなんと
思っ?』

『『殺さないことがあるっか?いや殺す』』

「予想以上にバカばかりじゃのう……」

「……………これはひどすぎ」

先ほどのキャラの強い二人のかなりの的を射た発言は誰の耳にも入る
ことはなかった。

クラスメイトが各々文房具という名の凶器を持ち出し、未だ明久は

マウントポジションを取られているというカオスな状況。しかし、意外にもそんな状況はすぐに静まることとなった。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『『『えっ？』』』

ガラスと扉が開く音とその後聞こえてきた女子の声に、その場にいた全員の視線が集中する。その人物を見て、もはやボロボロ状態の明久を除く全てのFクラスの生徒の動きが完全に止まった。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

『あのー……質問いいですか？』

小柄な体をさらに縮こませるように声をあげ、自己紹介をする桜色の髪と新雪のように白い肌が美しい女子生徒。その女子生徒に、文房具を持ったままの男子生徒の一人がおずおずと手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

『なんでここにいるんですか？』

「『なんでここにいますか？』」 『おいおい随分失礼なことを聞くんだな』 『可憐な女子に対してなんて口の聞き方だよ』 『これだからモテない男は嘘です調子乗りましたごめんなさい』」

首元にカッターナイフを突き付けられて明久は口をつぐんだが、質問をした男子生徒の疑問はもつともなものだった。

それというのも彼女、姫路瑞希はFクラスに留まるような学力の持ち主ではないからだ。彼女はこの学園で入学最初のテストで学年次席に食い込むほどの頭脳を持った才女なのである。

そんな生徒がなぜFクラスに？と疑問に思っるのは当然なのだ。

「そ、その……振り分け試験で、高熱を出してしまいました……」

だが、そんな彼らの疑問も、明久含めてすぐに『ああ、なるほど』と頷いた。

振り分け試験で欠席や途中退席すると無得点扱いにされてしまうのだ。明久も実際経験していたため、そのことだけは理解できた。疑

問が取り払われ、今度は数々の言い訳が飛び交う。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？むしろ熱出たほうができただろ』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『ちはやだっけ？アイマスもいいが、あまり自分を見失うなよ』

『俺は妹が事故に遭って、付きっきりで看病してて』

『どう見ても妄想です。本当にありがとうございます』

「う、ウチも日本語が読めなかっただけで……」

「『いやそれどう考えても致命的——』『すいませんでした』」

「よ、よろしく願いしますっ！」

瑞希がそう締め括り、怒気の引いたクラスメイト達が自分の席へと引き返していく。美波も馬乗り状態を解き、自分の席に戻った。

そんな動作が今度は荒々しく見えるのだから不思議なものである。

明久も自分の席に何とか戻ると自己紹介が続行された。ぐでつとしたままちゃぶ台に突っ伏していると、明久の耳に先ほどの女子生徒の声が聞こえてきた。

「き、緊張しましたあゝ……」

その声だけで俄然元気になるのがモテない男の性なのだが、そんなことは露知らず、明久は復活した。

「おい姫路、体調のほうはもう大丈夫なのか？」

雄二の野太い声で再び撃沈した。

「は、はいつ。えーつと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願い——って吉井くん！
？」

だらーっと突っ伏す明久を見つけた端希が驚きの声をあげる。どうやら自分のことを知っている人物のようだ。

「姫路。明久がブサイクですまん」

「『ねえ雄二くんそれフォローのつもり？』『雄二くんが原因なんじゃないか』『ごめんね、雄二くんがゴリラで』『バナナをあげれば何もしてこないから』」

「お前も随分な言い方だなオイ……！」

明久と雄二がメンチを切り合う中、瑞希がオロオロと場をとりなす。

「そ、そうじゃないんです！あの、明久くんは試験中に倒れたと聞いたので、それで……！あの、明久くん、もう大丈夫なんですか？」

「『ああ僕？』『見ての通り最悪だよ』『姫路ちゃんこそ無理しないでね』」

「しかし明久が倒れるとは……天変地異崩壊瓦解の前触れか？」

「『ねえ雄二くん』『僕が倒れるだけで世界が粉々なの？』『じゃあ大切に扱ってくれよ坂ウホくん』」

「おんもしれえあだ名ありがとよおバカ久あ……！！」

再びガンのくれ合いを繰り広げる二人にオロオロする瑞希。ひよっ

とすると、実はいい相性なのかもしれない。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせいでパンパンと教卓を叩いて福原教諭が警告をし、

バキィッ バラバラ モワァ

教卓がゴミ屑と化した。それと同時にどこに隠れていたのか、埃が
ありえないほどに舞う。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言つてトボトボと教室から出ていく福原教諭。あの人うつ病じ
やないよな、とクラスメイト達は若干心配になった。

「あ、あはは……」

「『はあーあ』『もう笑うしかないよこの設備』」

瑞希が苦笑いをし、明久が呆れ返る。それを見た雄二は、誰の耳に入れる訳でもなく、

「……それはどうかな？」

そう、不適に呟いた。

「さて、坂本君。君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

その後、壊れた教卓の替えを持ってきた福原教諭が戻り、HRが再開。とうとう最後の雄二の番になる。

ゆつくりと教壇に歩み寄るその姿は先ほどのふざけた態度は見られない。クラスの代表として、なかなかの貫禄があるように思える。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「『じゃあゴリラね』『はい決定』」

「さて、みんなに一つ聞きたい」

明久の冷やかに全く動じない雄二。そんな雰囲気そうさせているのか、間の取り方がうまいせいか、クラスメイト全員の視線が雄二へと向けられる。

その様子を確認した雄二は、ゆつくりと誘導するように視線を泳がせ、教室内の各所に移りだした。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れたちゃぶ台。

バカっぽそうな顔面。

腐敗した脳みそ。

「『ねえ雄二くん』『君とはぜひ決着をつけたいなあ』」

「Aクラスは冷蔵庫完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

明久の発言を華麗にスルーし、一呼吸置いて静かに告げた。

「——不満はないか？」

『『大ありじゃあああああああ——っっ！！！！！！！！！』』

二年Fクラス生徒の魂の叫びが、学園を揺らがせた。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

雄二の発言に同調するように次々と不満が爆発する。その反応に満足した雄二は、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべる。野生味満点の八重歯がキラリと光り、

「そうだな。諸君の気持ちは痛いほどわかる。そこで、これは代表としての提案だが――」

沸騰した場の空気が雄二の声を響かせるために鎮められる。大声の余韻が残る中、

「――FクラスはAクラスに、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

クラスの雰囲気はその一言で凍り付く。そんな中、ただ一人動く者がいた。

（『へえ……？』『やっとおもしろい展開になってきたぜ』）

彼の名前は吉井明久。

旧名、球磨川楔。

明久^裸はこれからの展開に期待に胸を膨らませ、誰よりも不敵に表情を歪ませ、嗤うのだった。

「だからこそ」(前書き)

バカテスト・物理

第四問

問 以下の文章の()に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、()である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え

『敵』

教師のコメント

あなたに何があったのですか。

須川亮の答え

『俺の嫁、すなわち女神』

教師のコメント

現実を見ない者に女神は振り向かないかと思えます。

「だからこそ」

FクラスのAクラスへの宣戦布告。ピラミッドで例えるなら、底辺が頂点に挑むという構図。

その戦いに勝利を収め、設備を奪う——それは、Fクラスの人間にはあまりにも現実味がなさすぎて、あれほど堂々としていた雄二が夢物語を語る哀れな人間としか映らなくなってしまっていた。

だが、どんな事象であろうと例外は憑き者である。

吉井明久。彼は雄二の言う言葉に強く興味を持った。底辺Fクラスによる頂点Aクラスの打倒。あまりにも滑稽で、かつ迷走していて、さらに荒唐無稽な話。

それは、とてもじゃないが無謀だ。

それは、誰が見ようと蛮勇である。

そんな提案に、なぜ彼はそこまで強い関心を示すのか。その答えは実に簡潔なものだ。

なぜなら。吉井明久を演じる彼は

ただ、分の悪い賭けというものが好きなだけなのだから。

『勝てる訳がない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんさえいればなにもいらない』

硬直が解けるなり、今度は非難轟々の嵐が訪れる。Fクラスの学力を鑑みれば当然のことだろう。それでも不敵な笑みを絶やさず、目を閉じてクラスメイトの非難を一身に受ける雄二から目を離し、明久は瑞希に自分の疑問を聞いた。

「『ねえ姫路ちゃん』『試験召喚戦争』ってなに？」

「あ、はい。えつとですね、要点をまとめると生徒一人につき召喚獣を一匹所持していて、その子達を戦わせるというクラス対抗戦のことです。あ、詳しいことが書いてあるプリントがありますよ」

もしこの質問を瑞希以外の生徒に問うたなら「お前一年間何してた

の「的ニュアンスの言葉がバカという単語付きで返ってきたことだろう。そう考えると、明久の人選もなかなかのものだ。

ぶっちゃけてしまえば、むさ苦しい男より美少女のほうがいいという下心故なのだが。

明久は瑞希から試験召喚戦争についてのルールやその他の詳細が書かれたプリントを受け取ると、礼を言うなり無言で読解に移った。それと同時に組んでいた腕を解き、雄二が教卓に手を突いて目を開ける。

「そんなことはない。俺が勝たせてみせる」

この学園にはFクラスとAクラス合わせて6組のクラスが存在する。それは学力順に振り分けられており、単純計算でも学力差、すなわち戦力差は6倍にもなる計算だ。

そんな絶望的かつ圧倒的な数値を見せられても、雄二が揺らぐことはない。

そんなものは所詮数値であると、そう高らかに宣言する。

『何をバカなことを』

『できる訳がないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

その力強い言葉を耳にしても、やはり否定的な思考は拭い切れない。当然だ。ここまででは、この宣戦布告は迷言以外の何物でもない。

「根拠？根拠なら充分にこのクラスには揃っているさ」

『『『え？』『』』』

「今からそれを証明してやろう」

故に、雄二は具体的な今ある戦力を分析する。言葉だけでは頼りないのなら、実際に根拠となることを見せてやればいいのだ。

「おい康太。畳に張り付いて姫路のスカートを覗いてないでこっちにこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

土屋康太。先ほど明久に三点リーダーくんと名付けられた男子生徒が飛び起き、必死に否定のポーズを取る。この構図を明久が見れば便乗するのは間違いないのだが、幸い彼はプリントに釘付けだった。

そんな彼をさておいて、教壇に上がった康太と呼ばれる生徒を雄二が紹介する。

自己紹介では明かされることのなかった、彼の裏の顔を。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙^{ムツリーニ}なる性職者だ」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前は、実はあまり一般に知れ渡っていない。しかし今雄二が口にしたムツリーニという名前は、一転して男子からは畏怖と畏敬の念を、女子からは軽蔑の目を向けられている。故に、その事実を聞かされたFクラスは戦慄した。

『バカな……………奴が、あの……………ッ！？』

『見る……………！くつきりと残った畳の跡を必死に隠そうとしている……………ッ！！』

『ああ……………！ムツツリの名に恥じない姿だぜ……………ッ！！』

早い話がムツツリスケベである。三点リーダーを多用するなど、実にノリのいいクラスだった。

「姫路のことはみんなその実力をよく知っているはずだ」

「え？わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待しているぞ」

姫路瑞希。その学力は先ほど話題になった通り、学年次席というズバ抜けたものを持っている。Fクラスにとって全ての分野において綺羅星のごとく輝く彼女がいれば、相当の戦力になるのは明白だ。

『そうだ！姫路さんがいるんだった！』

『ああ、彼女ならAクラスにも引けを取らないぞ！』

『さすが姫路さんだ。彼女さえいれば何もいらないな』

見る見る内に上がっていく土気。その光景を雄二は満足そうに見遣り、さらに畳み掛ける。

「それに、木下秀吉だっている」

「んむ？ワシもかの？」

木下秀吉。学力ではあまりその名を耳にすることはないが、他のことで彼は有名だ。

曰く、演劇部のホープ。

曰く、優等生である木下優子の双子の弟。

曰く、絶世の美少女（謎）。

などなど、変なものも若干混じってこそいるが、噂のタネにされやすい人物であることには変わらない。

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学生の頃「神童」って呼ばれてなかったか？』

『じゃあ試験は姫路さんと一緒に体調不良だったってことか？』

『確かになんかやってくれそうな奴だな！』

坂本雄二。教壇に堂々と演説めいたことをしている今の彼を見て、Fクラス故にバカと呼ぶ者は決していないだろう。その指揮力や統率力、リーダー性には目を見張るものがあり、かつては飛び抜けた学力から『神童』と呼ばれた経験もあるほどの人物なのである。

気がつけば、Fクラスの生徒のいけそうだ、やれそうだ、という積極的な声が教室を震わせるまでに士気が上がっていた――

「さらにだ。《観察処分者》の肩書きを持つ、吉井明久だってい」

「『あーごめん』『今読書中ー』」

『』』』……………『』』

——にもかかわらず、教室は一瞬にして水を打ったような静寂が訪れた。

「『なるほどね』『大体理解したよ』『要はAクラスを蹴落として設備を奪うってことだよね』」

そんな中、間の抜けた声がやけに耳につく。先ほど名前を挙げられた明久だ。彼はいかにも面倒くさいと表情で語り、立ち上がった。

「『僕はやだなあ』『そんな野蛮なこと、ゴリ本くんだけでやってくれよ』『戦争なんてバカげたことをなんでわざわざしなくちゃならないのさ?』『そもそもAクラスだぜ?』『たとえ今雄二くんが挙げた人の尽力があっても所詮それは「Fクラスの中で」って言葉で片付けられるのさ』『言いたいことがわかるかい?』『Aクラスは誰一人欠けることなく成績のいい粒揃いだ』『そりやそうだよね』『途中退席するだけで0点扱いにされる厳しいテストの中から勝ち残った人しかいないんだから』『それに比べて僕達Fクラスはどうだい?』『例えるならそうだな』『雄二くん』『君は手にあるたくさんの水風船と高性能な水鉄砲だけで海の大波に立ち向かうと思うかい?』『僕は普通、普通じゃないけど思わないよ』『無理は言わない』『やめちまえよそんなこと。』」

饒舌。まさにその言葉がピッタリはまるほど、明久の弁論は滑るように口から流れてくる。その後ろ向きな考えから、Fクラスの教室はさっきの震えが嘘のように静まっていた。

誰もが戦意を削がれているにもかかわらず、明久は

「『だからこそ』 Aクラスを負かしてやろうじゃないか。』」

自分の参戦を表明した。

「……ほう？なぜだ？明久」

ざわめくFクラスに、教壇に立つ雄二とちゃぶ台に登った明久の視線が交錯する。その構図は、まさしく信頼し合う親友そのものだ。

いや、正確に言うならば信頼しているのは雄二のほうだけだ。明久はただ、自分のやりたいことをやるだけ。

それを、雄二は前向きなものと信用しているのだ。

「『決めてるんだ。』 『僕は戦いになったら一番弱い立場の子の味

方をするつて。』『なんだい？この空気は？』『なんだい？この設備は？』『なんだい？この環境はさあ？』『こんな廃屋じみたところに押し込まれて病気にでもなったらどうするんだい？』『残念ながら、男としてそんな事態はほつとけないな。』

明久の言葉に、女子二人を除いた男子全員が失った戦意を取り戻していく。そうだ、自分達ならまだ我慢できるが、姫路や島田は病気になるてしまう可能性が充分にある。このクラスの華を失わないためにも、Aクラスを打倒しなければならない、と。

不純だろう。戦争の理由が女子のためなど、不純という言葉一つで表すことができる。

だが。

「『不純で何が悪いんだい？』」

明久は、そんなものは関係ないと断言する。そんなもので、自分が止まることはないと宣言する。

「『僕は悪くない。』『悪いのは僕達じゃないだろう？』『正義悪倫理常識建前哲学有利不利欲望命その他諸々一切関係なく。』『た

だ、か弱き者を守るために！」

凜とした表情は、ほんの少しだけどこかの女子生徒会長を彷彿とさせた。だが、それも一瞬のこと。再び不敵な表情に戻した明久は、静かな水面を思わせるような声で、ただ自分の願望を告げた。

「『引つ掻き回してやろうぜ。』この腐った学園を。』」

次の瞬間、沈黙していたFクラスが力強い雄叫びをあげた。

何者にも止められない勢いと、信念を乗せて。

「それじゃあ明久。まずはDクラスだ！宣戦布告をしてこい。無事大役を果たせ！」

「『それはやだ』」

「……参ったな」（前書き）

バカテスト・化学

第五問

問 『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久のコメント

『簡単すぎるので』『敢えて書きませんでしたー』

教師のコメント

もつとなめている生徒がいたとは。では難関大学クラスの問題集を用意しておきますので、あとで職員室に来るように。

「……参ったな」

結局、Dクラスへの宣戦布告は押し切られた明久と自ら志願した美波が二人で行くこととなった。雄二が言うには問題ない、俺を信じろ、騙されたと思って行ってこい、などの一点張りで、確かに漫画やドラマのように危険な目に遭うとは限らない。だが、それ以前に明久はただ面倒くさがっていた。

「ほら吉井！さっさと歩く！」

「『はーめんどくさい』』ていうか島田ちゃんだけで行けばよかったじゃない』』どうして僕まで巻き込むのさ？』』」

先ほどの一件が尾を引いているせいか、美波に対して明久が胸を高まらせるようなこともなくなっていた。彼は惚れやすいのと同様、冷めやすい性格らしい。

「だ、だってこういうのってドラマとかでは大抵ひどい目に遭うじゃない。一人だと何かと危険でしょ？」

むしろこの二人だと僕が危険だ、と明久は心の中で小さくぼやく。

もはや明久の美波へのイメージはパワーファイターやキックボクサーなどの職業にクラスアップしたようだ。天は人に二物を与えず、という言葉が不意に頭の片隅をよぎる明久だった。

「『じゃあなんでわざわざ立候補したのさ?』『僕は一人でも行くつもりだったんだぜ?』『むしろ一人のがよかったかも』」

「……だつて」

ぶう、と美波が頬を膨らませる。不満げな表情だ。

「坂本はウチを戦力扱いしなかったんだもん……なら、他のことで役に立つしかないでしょ?」

「『あーそつか』『オチ扱いもマスコット扱いもしてくれなかったよねえ』『まったく雄二くんも人が悪いよ』」

もしも、吉井明久ではなく球磨川楔のほうの人格を知る人物がこの光景を見れば、きっと首を傾げたことだろう。いや、人によれば嫌悪したり歓喜したりと様々であろうが、疑問に思うことはまず間違いない。

事実、この球磨川楔という人物はここまで人に友好的に接したりはしなかった。しかし、それは過去形である。彼が以前に属していた

生徒会では、彼は一人の女の子のために命を惜しまなかった。それは、革命的な変化であらう。

確かに、彼は過負荷^{マイナス}という人種だ。そんな人物が、自分の中で決めているという理由だけで命を投げ捨てることができるか。かつての彼では見ることでできなかった、革命的な変化。

人は、それを改心と呼ぶ。

だが、吉井明久の皮を被った球磨川楔がその言葉に当て嵌まるかどうかは定かではない。吉井明久という人格と球磨川楔という人格が入り混じっている、という可能性も0ではないのだ。それは決して改心とは認められない。

故に、彼が改心したかどうかの答えはわからない。まさに謎に包まれている。

「『2・D……』 うん、ここだね」

だが、彼は考えることをよしとしなかった。

謎であるなら、謎のままでもいい。

自分のいた世界に戻れないなら、別にそれでもいい。

彼の目的は、桜並木を歩いた時と同様、今も変わらない。

『真人間を目指す』

球磨川楔は、もしかすると、とっくに『改心』をしているのかもしれない。

「『じゃあ島田ちゃん頑張ってきてね』『僕も頑張って応援してるから』」

「ちょ、ちょっと！こういうのは男子の仕事でしょ!？」

「『やだなあ島田ちゃん何言ってるのさ』『男子なら僕の目の前にぐぶあつ!』『ちょ、パーで内臓にダメージ与えるのやめてよ!』『てかそれ掌底っていうんだけど!?!?』」

「吉井がバカなこと言うからでしょ！ウチはれっきとした女子なんだから！Dクラスに宣戦布告しないと戦争にならないじゃない!」

「『けほっけほっ』『うーん、でもなあ』『ほら、絶対襲って来そうじゃない?』『』」

「ま、まあドラマとかではそうね……じゃあ、宣戦布告してすぐ逃げる……とか？」

「『うーん』『雄二くんは相手の同意を取ってこいって言ったしねえ』『まあいいや』『僕は早くだったらしたいから行くけど』『島田ちゃんはどうする？』」

「う……。い、行く」

「『オッケー了解』『じゃ、女の子に危険が及ばないようにしないとね』」

渡り廊下の先、目の前にある一般的な教室のドアを一思いに開ける。ガラッという音が教室の喧騒を掻き消し、Dクラスの生徒の視線が遠慮会釈なく明久達に集中した。雑談などの音響がにわかに静まり、美波はその視線に若干怖じけづいたが、明久はまったく気にした様子はない。

ドアと同様、至って普通の教室にカツカツという足音がリノリウムの床に一人分だけ響く。足音は教壇へと向かっているようで、ゆっくりにゆったり音を刻み、それがまたクラスの注目を集めていた。誰だあいつ、などの疑問がひそひそと飛び交うが、それらの声は明久の放つ足音の音量には遠く及ばない。声を出してはいけないような夜の闇が醸し出すような厳かな空気が漂う中、まるで長い時間が過ぎたような感覚で教卓の前に辿り着いた明久は、

「『えー』『モブキャラのみなさんこんにちは』」

Dクラスの心を、ポツキー感覚でさくつとへし折った。

『『ぎゃあああああああああ——つつ——！！！！！！！！』』
『』

「『どうしたんですかモブキャラのみなさん！』『最初で最後の出番なのに！』」

『『『ぐぎゃあああああああ——つつ——！！！！！！！！』』』
『』

「『所詮やられ役だからなんだっていうんですか！』『せいぜい潔くやられて経験値になってくださいよ！』」

『『『うぎゃあああああああ——っつ！！！！！！！』』』

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。ある者は首を掻きむしり、またある者は体を痙攣させるなど、Dクラスの精神がもはや廃人状態にまで落ち込む。もう死にたいどうせ俺らは脇役だ生まれ変わったら微生物になろう、と生きる気力すらなくした惨憺たる状況のDクラス。

「エグいわね……」

この戦争が終わったら、Dクラスには改めて謝罪をしようと思う美波だった。ともあれ、これで安全に宣戦布告ができそうだ。明久の下へ駆け寄る美波だが、明久の視線が異常なほど一点を凝視していることに気づく。

「吉井、どうしたの？」

「『……参ったな』『どうやら、モブキャラの集団って訳じゃなかったみたいだ』」

同じく教壇に着いた美波が明久の視線を追う。その先には、死屍累々といった惨状の中で床に突っ伏す生徒がほとんどにもかかわらず、明久の精神攻撃をもともせず直立している生徒が——二人。

「お姉様あー！美春に会いに来てくださったんですねー！」

「み、美春！？あんたDクラスだったの！？」

片方はルパンダイブさながらに美波に抱き着く縦ロールの女子生徒。先ほどの発言で明久はどんなキャラか納得したが、もう一人の生徒がどんなキャラを持っているかは未だ見抜けていなかった。

見た目は地味の王道を極めたような、黒髪に三つ編みの女子生徒だった。だが、その目に宿している光が他のDクラスの連中とは明らかに異なる。爛々と輝かせた目が映しているのは、当然目が合った状態の明久だろう。まるで、彼女の瞳は明久しか映していないような、他のことはまるで興味ないといった感じの目。隣で繰り広げられている美春と美波の攻防を放置したまま、明久は彼女の開いた口に耳を傾け、

「か……可愛い……」

「『逃げよう島田ちゃん』『このクラスはマジでやばい』」

ドアに駆け出した。

「ちょ、ちよつと吉井!?ま、待ちなさいよ!」

「お姉様!逃がしません!」

「待つて!そこの女の——男の娘!もつとよく顔を見せて!」

「『くつそお!』『そういうキャラかよ濃いにも程があると思うんだけどなあ!』」

Dクラスから出てきた二人を追うように、すぐさま教室から先ほどの二人が飛び出す。異色の鬼ごっこが始まった瞬間、明久と美波は全速力で力の限り走り出した。

「……参ったな」（後書き）

誤字が多いなと自分でもつくづく思います。指摘のたびに修正を加えますので、感想と合わせて教えていただけると助かります。

「知るかよそんなこと」(前書き)

バカテスト・英語

第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - abnormal - infinity!』

教師のコメント

程度を書け、と言った訳ではありません。そしてちゃっかりテンションを上げないでください。

土屋康太の答え

『b a d - b u t t e r - b u s t 』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

須川亮の答え

『b u s t ! - b u r s t ! ! - b e a s t ! ! ! 』

教師のコメント

『おっぱい』『…したくてうずうずしている』『獣』。まさにあなたのことですね。姫路さんの身が心配でなりません。

「知るかよそんなこと」

――10分後。

「『あははー』『今日の美波ちゃんもかわいーなー!』」

「も、もー、何言ってるのよー、あ、アキー」

仲睦まじい恋人のような雰囲気や言葉を交わす明久達を、Dクラスの二人が絶望した目で見るという状況が出来上がっていた。二人はそれこそ恋人がするように手を握り、ついでに汗も握ってこちらを見つめてくるDクラスの二人の様子を伺っている。いや、美波に至っては顔を赤くして明久の顔もチラチラと伺っているようだった。その姿はまさしく恋する乙女そのものである。

そもそも、一体なぜこんな状況に陥ったのか。

それは10分前に遡る――

「『ねえ、島田ちゃん』 相談が、あるんだけどっ」

「なに！？何か思いついたの吉井！？」

絶賛校内フルマラソン中の二人。実に春らしく健康にもよさそうだが、後ろから迫る先ほどの女子二人に追いかけられているせいでそんな平和的なものではないのは明らかだろう。もしこの光景をフクリスの誰かに見つかりでもすれば第一級異端者の称号まで与えられてしまう。その先に待つのは天国に住まうおじいちゃんとの再会しかない。

背後に冷たいものが流れる中、必死に明久は走り、なんとしても生き残るために自分の考案した策を伝えた。

「『二手に別れるんだ』 そのほうが絶対に安全だよ』」

「二手のほうが安全？なんで！？」

「『だって僕には』『男子トイレっていう心強い味方がいるからね！』『じゃ、そういうことで！』」

「ま、待ちなさい吉井！あんた自分だけ助かる気！？」

「『大丈夫さ島田ちゃん！』『僕は君の屍を越えていく！』」

「それ普通逆よね！？『俺の屍を越えていけ！』『じゃないの！？』」

「『あつはつはー！』『ドラマの見すぎだぜ島田ちゃん！』『少年ジャンプじゃあるまいし』『リアルでそんな台詞期待するもんじゃないぜ！』」

「『こ、このゲス野郎！』」

「『あははははー！』『最高の褒め言葉ありがとう！』『恨むならドラマじゃなくてジャンプを見なかった自分を、』」

『お姉様と肩を揃えて走るなんて……！許せません！待ちなさいそのブタ野郎！』

『と、トイレ！？う、うん！私、そういうの初めてだけど、頑張るね！一生懸命頑張るから！』

「二手に別れるのね？じゃっ、幸運を祈るわ吉井」

「『待つてえー！』『お願い一人にしないでえー！』『あの人が絶対やばいよ！』『肉体的にも精神的にも殺されちゃう！』」

縦ロールの女子は美波を、三つ編みの女子は自分を考えていた明久だったが、いつの間にか縦ロールの女子の標的が変更されていたらしい。三つ編みの女子はトイレまで追いかけてくる気で、何を頑張るのか明久は戦慄しっぱなしだった。とりあえず男の尊厳が打ち砕かれるのは確実だろう。囿にこそされかけたものの、さすがに不憫に思えた美波はほぼ半泣きの明久の隣についていていた。

「で、どうするのよ吉井。もう策はないの？」

「『えーっと』『あ、このまま逃げ続けるとか』」

「どこまでも追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『うぐっ』『あ、どこかに隠れよう！』」

「匂いで追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『ぬぐぐ』 あ、Fクラスに戻ればいいんじゃない！？」

「ところ構わず追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『君ら二人ツツコミどころが多すぎるぜ！？』」

誰よりも苦勞している美波だった。

「……ね、ねえ吉井。ウチに任せてみない？」

「『え？』 島田ちゃんに？」

「ちよ、ちよつと提案があるんだけど！……乗ってみる？」

提案があるだけでなんでそんなにどもるんだろう、と思った明久だが、自分の考えた策は先ほど無惨に散ったばかりだ。他に思いつく考えもなし、それに、走り始めて10分が経過しようとしているにもかかわらず、後ろの二人は息切れすら——否、息切れはしているようだ。だが、明久にはそれが疲労からではなく興奮から息切れ

しているように思えてならなかった。もはやトラウマ級の恐怖である。

美波の提案に、さすがに体力の限界が近づいてきた明久は頷いて肯定の意を示す。後ろの二人に聞こえないよう耳打ちしてきた美波の口から出た提案は、まさしく賭けと呼ぶべきものだった。

「『……マジで？』」

「そ、それしかないでしょ！？嫌なら別に——」

「『いや、やろう』『そろそろ体力の限界だしね』」

「『……じゃ、じゃあ。予定、通りに』」

こくりと頷く明久。その直後、明久と美波は立ち止まり、後ろを向いて声を張り上げた。

「『その二人、止まれ！』」

「ブタ野郎風情が美春に命令しないでください！」

「ねえその男の娘！何て言うお名前なの！？」

「『止まってよ！』『せつかくクライマックスっぽく言ったのに！』『もうやだ君ら！』」

「二人とも、止まりなさいっ！」

美波の言葉でようやくブレーキをかけるDクラス二人。その隙に、すかさず美波は声を重ねる。

「二人とも、ウチらを追いかけるのはもうやめて。美春も、そのあなたも」

「どうしてわかってくれないのですお姉様！美春はこんなにもお姉様を愛しておりますのに！」

「やだもん！その娘は私がお持ち帰りして蠟人形にして一生の宝物にするんだから！」

「『怖っ！！』『それ殺人だよ！』『僕の人権どこ行つたのさ！？』」

「吉井……じゃ、なくて……。あ、アキ！少し静かにしてて」

美波のその言葉に、Dクラスの二人の動きがピタリと止まる。自分の耳にしたことが信じられないのか、胡乱な目が眼前の男子生徒と女子生徒の間をさまよう。

その様子を見た美波は、意を決したように明久の手を握り、

「だ、だってウチとアキは……、つ、付き合ってるんだから！」

爆弾を、投下した。

——そして、今に至る。

予想通り、効果はてき面。Dクラスの二人は世界の終わりを目の前で見たような表情で明久と美波の睦まじい姿を凝視している。どうやら美波の『恋人のフリ』作戦は成功したようだ。

とはいうものの、さすがにこうして手を繋ぐ様をジロジロ見られるのは好きではない。というか、恥ずかしい。さっさとこの場から逃げようと、美波は最後に締め括る。

「じゃ、じゃあそういうことだから！もう追いかけて来ないでね」

「ま、待ってくださいお姉様！なら、美春とのあの夜は遊びだったんですか！？」

「変な言い方しないでよ！？別に何もしてないでしょ！？」

「いいえ！お姉様はいつも美春がベッドに横になると甘い言葉をかけてくれました！それも毎日！」

「妄想！それ妄想だから！夢と現実の区別くらいはつきりしてよ！？」

「そつだよその男の娘！私のこの気持ちはどこにぶつけばいいの！？」

「『知るかよそんなこと』 『その壁にでもぶつけられ？』」

「そつじゃないと私……！あなたを殺して蠟人形にするっ！」

「『だから怖いよ！』 『しかもあなたを殺して、の後って』私も死ぬ！』 『じゃないの！？』 『ちゃっかりやりたいことやっちゃってるよ！』」

「とにかく！二人とも、もう追いかけるのはやめて！行く、あ、アキ」

その言葉で、今度は硬直を通り超して石化状態で立ち尽くすDクラス
の二人を置いて歩き出す。後ろから追いかけてくるような足音も
呼び止める声もなかったが、未だ手を繋いだままの二人は盛大にた
め息を吐き、自分のクラスへ足取り重く引き返していくのだった。

「で、宣戦布告はしてきたのか？」

「……あ」

「『その前に一発殴らせる』」

結局、Dクラスへの宣戦布告は明久にジジイ口調くんと命名された秀吉が行き、屍状態継続中のDクラス代表からあっさりと同意を得たのだった。

「……それより二人とも、なんだか仲良くなってませんか？」

「『え？』『むしろ悪くなった気しかないよ』『でしょ？美波ちゃん』」

「え、あ、そ、そうね、アキ」

「……おれにだけ」

「知るかよそんなこと」(後書き)

総合評価が1000ptに…感極まる、とはこのことでしょうか。
これからもよろしく願います！

「君つてもしかして」(前書き)

バカテスト・保健体育

第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は()を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『女の子の日』『早い話が生理ですね』

教師のコメント

惜しいですが、不正解です。それより一度はぐらかしたのになぜ直球で言ってしまったのですか？

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

工藤愛子の答え

『生まれて初めての月経、すなわち生理のことで、一般的には初潮、医学用語では初経と呼ばれるもの。古くは初花とも呼ばれ、初潮の数ヶ月前から透明または白色の帯下の増加が見られるようになった後、初潮が発生する。初潮は日本人の平均は12.4歳で、大部分は10歳から15歳の間、身長伸びが低くなり始めたところに発生することが多いが、早い場合で8歳、遅い場合で16歳以上で発生する例もある』

教師のコメント

あなたたち二人、詳しいのは結構ですが、これを書く時間があるなら一問でも多く回答しようと思わないのでしょうか。それに回答欄

に合致していないので不正解となります。

「君ってもしかして」

屋上。

日光を遮る遮蔽物がないせいか、その場所はポカポカという春特有の陽気に包まれていた。時折吹き付けるそよ風は南の島からやってきたもので、寒くもなく暑くもない、春という過ごしやすい季節の天候を最大限に表現している。そんな麗らかで、眩しい光の中、雄二によってミーティングと称された作戦会議が開かれていた。

「『で？』 雄二くんはどうやってDクラスを屈服させる気かな？」
「わくてかわくてか」

ちなみにこの作戦会議には明久も参加しているのだが、彼にしては珍しく面倒くさがらずに大人しくついてきていた。早く試験召喚戦争というものを体験してみたいからか、雄二の作戦というものに興味津々のせいかな、はたまたFクラスに火を点けた責任のためか。最後者だけはないと断言できるだろう。

何はともあれ、彼はこの戦争に、至って積極的な姿勢で取り組んでいた。

「今から話す。それより秀吉、開戦時刻はいつに設定してきた？」

「一応、今日の午後と告げて来たぞい。ちゃんと同意も取ったのじや」

屋上のフェンスに腰を下ろす雄二の質問に、同じくコンクリートの地面に座る秀吉が応答する。彼の口ぶりから、例の女子二人はDクラスに戻ってきていないらしい。

「『ま、君の容姿ならDクラスに襲われることはまずないだろうね』
『別の意味で襲われそうだけど』」

「んむ？明久、どういう意味じゃ？」

「『蠟人形のコレクションがまた一つ増えそうだ』
『ってコトだけ言っとくよ』
『ハア……』」

「ハア……」

「????」

「あ、あの。二人とも、何かあったんですか？」

純粹に心配しているらしい瑞希に質問され、苦虫を噛み潰したような顔をする明久と美波。Dクラス戦の前からいきなり戦意を削り取られている二人である。

「……………何かあった？」

「『ちよつとねえ…………』 縦ロールと三つ編みの女子に追い立てられてさ」 『死線を越えてきたところだよ』」

「縦ロール？…………おい明久、そいつの口癖は？」

「『お姉様とブタ野郎』」

「清水か」

即答だった。美波に飛び掛かってきたりと、どうやらそつち系に定評のある人物らしい。ぜひと関係わり合いになりたくないと感じる明久。今度襲われたら美波ちゃんを囷にしようと心に誓うのだった。

「だが、三つ編みの女子は聞いたことがないな…………お前はそいつに追いかけられていたのか？」

「『まあね』『ホント殺されそうな勢いだっただよ』」

「そうか。……康太」

「……………（コクリ）」

雄二が康太に目配せをする。調べておけ、ということだろうか。確かに躊躇なく人を蠟人形にするつもりだったりと、危険人物に変わりはない。

それにしても、目配せだけで言いたいことが伝わるなんて随分仲が良いんだな、と明久は思う。以前の吉井明久ならできたのかもしれないが、今の自分では到底不可能だろう。そんなことを考え、明久は太陽に限らず眩しげに目を細め、夢げに微笑んだ。

「それはそうと……午後からってことはお昼ご飯を挟むのね？坂本」

「ああ、そうなるな。明久、今日の昼くらいはまともなもん食べろよ？」

「『ああ、それなら大丈夫さ』『昼に限らず、今日はちゃんと割り箸を食べてきたからね』」

「待て明久。お前の中の『まともな食べ物』の定義を教えてください。
一瞬本気で耳を疑ったぞ」

「え、ええっ！？吉井くんって——割り箸が主食なんですかっ！
？」

「おかしいのう……姫路の台詞で涙が出てきたのじゃ……」

「……………強く、生きろ……………っ！明久……………っ！！」

「『あははー』『同情するならメシくれメシ』」

和んだ空気が一転、葬式みたいな雰囲気になで落ち込む。怒涛の勢いで同情されている明久だった。

「食費がないとは言え……人類の可能性には目を見張るものがある
な……………」

人類の限界に挑戦する明久だった。

「……………あの、よかったら私がお弁当を作ってきていいですか？」

「『え？』 姫路ちゃんか？』」

「はい。その……やっぱり心配ですし……」

「『うわマジで！？』 『やっぴい夢の女の子のお弁当じゃん！』」
「んじゃ早速明日の昼ねー！』」

「アキ……よかったね…… ホント、よかったわね……！」

「明久……！ちゃんと味わって食べるんじゃぞ……！」

「『あーっん』 とりあえずその戦場からの生還者扱いするのやめるー？』」

割り箸おいしいのになーと心の中で呟く。今度割り箸のフルコースを振る舞ってやろうと考える明久だった。まったくもって迷惑極まりない。

「……………殺したい程、妬ましい……………！」

「あ、それなら、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「は、はい！迷惑じゃなければ……」

「おお、それは楽しみじゃのう」

「……………！（コクコク！）」

「『ちえー』『ま、僕だけじゃないっていうのは残念だけど』『じや僕も割り箸弁当を作って、』」

「それは迷惑だ」

「それは迷惑よ」

「それは迷惑じゃ」

「……………迷惑」

「『わーい清々しい程全否定』『君達好きだぜー』」

「あはは……」

困ったような、それでいて実に楽しそうな瑞希の笑顔が花開く。春の陽気に彼女の笑顔は、やはりその人を和ませる雰囲気故だろうか、驚く程似合っている。その様子を見た明久は、前々から感じていた疑問を聞いてみることにした。

「『ねえ姫路ちゃん』『君ってもしかして』『頼み事は断れないタイプ?』」

「え? あ、えっと……はい。どうしてもそうというのは……」

「『ふーん』『そうなんだ』」

顎に手をやり、ふむふむと頷く明久。それを瑞希は不思議そうな目で見てみると、不意に顔を上げた明久と視線が衝突する。次いで、明久の口から出た言葉は、

「『じゃあ姫路ちゃん』『明日から裸エプロンで』『僕に傳け』」

和やかな空気を一瞬で凍らせた。

「……………?」

春にもかかわらず極寒のブリザードが屋上一帯に吹き荒れる中、明久の言葉が脳に伝わっていないのか、可愛らしく首を捻る瑞希。唯一状況を理解していない彼女を差し置いて、ようやく凍った空気が氷解する。それと同時に、混乱の極みが屋上を支配した。

「アキいっ！！あんなん、ななな、なんちゅーこと頼んでるのよおおっ！！？?」

「『いや!』『いやいや違うんだ美波ちゃん!』『僕はただ頼み事を断れないなら裸エプロンになってほしいって思っただけで!』」

「そっちのほうか余計悪いに決まってるでしょおっ!?!」

「あ、明久!!それはさすがにどうかと思うぞい!?!」

「……………絶対許さない……………!!」

「明久……お前は時々俺の想像を超える人間になるな……。ってかよく『傳く』なんて言葉知ってたな」

ガクガクと明久の襟首を揺さぶる美波に焦った様子で迫る秀吉、文房具を取り出す康太、呆れてるのか感心してるのかわからない雄二と、状況が一気に混沌としたものへと陥る。明久に至っては美波にされるがまま状態で、目を回して気絶しているようだ。当然の報いと言わざるを得ない。

そんな中、戸惑った風の瑞希が疑問の声を上げた。

「あの……裸エプロンってなんですか？」

「……姫路さんマジ純粹いい——っ!!」「」「」

姫路瑞希。Fクラスに舞い降りた天使と呼ばれ、学年次席の成績を持つ才女である。

「ふう……。さて、話が180度逸れたな。明久は気絶してやがるが、本題に戻るとしよう」

仕切り直すように平然と明久の上に座る雄二が話を持ち出す。気絶している明久は実に幸せそうな笑顔だ。どうせ裸エプロンの夢でも見てるんだろう、と瑞希以外のメンバーが心配することはなかった。

「そういえば雄二よ、一つ気になっておったことがあるんじゃないが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏むならEクラスじゃし、ワシらの目標はAクラスじゃろう？」

「あ、そういえばそうですね」

打倒Aクラス。そんな目標を掲げているにもかかわらず、雄二が宣戦布告を命じたのはDクラスだ。順番的におかしいし、なぜAクラスに戦争を仕掛けないのか疑問に思うのは当然だろう。

「理由はいろいろあるが、Eクラスを攻めないのは戦うまでもない相手だからだ。振り分け試験こそ体調不良だったが、姫路に問題が

ない今、Eクラスには絶対勝てる」

「じゃあ、Dクラスは危ないってことなの？」

「確實、とは言えないが、Aクラスを打倒するために必要なプロセスだ。そのために、姫路と康太の力はかなり重要になってくる。島田と秀吉はその補佐だな」

了解、と言うように全員が頷く。それを目にした瑞希は、兼ねてからの不明瞭な点を雄二に質問した。

「あの、坂本くん。ちょっといいですか？」

「ん？なんだ？姫路」

「吉井くんの役割は何でしょう？それと、さっきも言ってた『観察処分者』ってどういうものなんですか？」

「ああ、ダークホース姫路は知らないのか。とりあえず、こいつの役割は——
伏兵だ」

「伏兵……ですか？」

「……………やっぱり、物に触れるから？」

「それもある。姫路、後者の質問だが、『観察処分者』とは教師に目を付けられて召喚獣で雑用係を強要させられる生徒のことだ。そのために物に触れるよう調節されているらしいんだが、これがかなり役に立つ。明久の言った通り、こいつには戦場を引っ掻き回してもらうつもりだ」

「それってすごいですね！召喚獣って見た目よりずっと力持ちらしいですし」

キラキラとした視線を明久に送る。問題児扱いされているだけということに気づいていない瑞希は相当の天然だろう。

「『なるほど』『伏兵、ね』」

ある程度話が済んだところではちつと目を開ける明久。口ぶりから推測すると、どうやらそこそこ前から目が覚め、話に耳を傾けていたらしい。その表情は細めた目と微笑を湛え、

「『そりゃあいいや』 『伏兵……いい響きじゃない』 『異質で愚劣で性根の腐った役立たず^{マイナス}である僕にとって』 『実^ミに的^{テキ}を射た役職^{ダクシヤク}だぜ』」

歪んだ口元が、この試験召喚戦争を暴風雨ながら荒れに荒れさせることを、暗に予告していた。

机上の空論

鮮やかな夕焼けだった。

太陽が沈む時間帯特有の赤い光は夕日の赤と青い空のコントラストを生み、見る者を惹き付けるような美しさを孕んでいる。ガラスの窓を突き抜けるその光は学校内部にまで侵入し、無音の生徒玄関を明るく照らしていた。

放課後の学校とはかくも淋しく、空っぽな場所である。無垢な生徒によつて賑やかな音を立てる訳でもなく、子供達が走り回るような朗らかな絵を映し出す訳でもなく、生徒の笑い声が明るく響く学校の裏面が顕著に表れていた。外のグラウンドからも何の声も聞こえない、音を失ったような場所。

「『うーん』『こりやまいったなあ』」

そんな廃れた学校から、今まさに出て行こうとする生徒がいた。自分の下駄箱に顔をつっ込み、落ち着かない様子だ。

彼の名前は吉井明久。この小学校に通う生徒の一人で、至って普通の小学生だ。少なくとも、自分では普通だと思っている。

だが、それは大いなる勘違いだった。普通の小学生は括弧付けた喋り方などしない、総じて無垢なものだ。さらに、彼に接するだけで体に巢喰い、蝕むような濃密すぎる嫌悪感が彼を圧倒的な『特異』へと至らしめていた。

それを他の生徒は敏感に感じ取ったのだろう。この時期の子供達は周囲のことにとっても敏感だ。敏感で、好奇心旺盛で、残酷である。自分のしでかすことの重要性、相手が受ける痛み、罪深き者を裁く法律。それらを知らないが故の残酷が、子供達には備わっているのだ。

事実、明久の覗く下駄箱には彼の靴が入っており、靴の中には画鋏が仕込まれていた。早い話がイジメである。

明久のその特異さを恐怖して及んだ行為だろう、自分達とは明らかに異質な明久を目にして、敏感な子供達は恐怖故に、無知故に迫害していた。鉛筆を全て折り、ノートに誹謗中傷の限りを尽くし、靴に画鋏を仕込んだりと、思い当たるイジメの所業は大抵試した。

それでも、明久は笑みを崩さなかった。

彼は靴の中に潜む悪意を愛おしそうに見つめ、

「『早く帰らないと、お母さんに叱られちゃうよ』」

そのまま、画鋏入りの靴を履いて、帰路に着いた。

この純粋な悪意にいち早く気づいたのは、彼の担任である生徒達に人気の女性の先生だった。彼女は折れた鉛筆や明久のノートを見て、イジメを受けていることを知ったのだ。

その事実を知った彼女は、明久のノートを片手に自分のクラス全員を叱り付けた。

『イジメなんてこと、絶対にしてはいけません！』

それっきり、明久へのイジメはピタリと止んだ。イジメていた子供達にとっても、明久への恐怖心は日に日に増大していったのだろう。

イジメはその日をもって終結を迎え、今度はクラス全員での無視が始まった。だが、先のイジメと異なる点を上げるとすれば——それは、『嫌悪』からではなく、『恐怖』からの行為だということだろう。それでも明久は平然とクラスメイトに挨拶をするし、気さくに話し掛けたりもした。子供達はそんな明久の心情が理解できず、溝は深まるばかりだった。

決定的だったのは体育の時間での出来事だろう。その状況を改善したいと考えていた女性教師は、その時間にあらかじめ決めてあったペアで体育前のストレッチをさせた。

最初の明久の相手は少しぼつちやりとしていて、桜色の髪が眩しい女子だった。彼女も同じくその体型のせいでイジメを受けていて、同族のよしみ故か、彼女は明久との会話に弾んだ声で応答していた。その光景を、クラス全員が盗み見していると知らずに。

次の体育の時間、明久のペアはかつて明久をイジメていた男子だった。当然、ペアになっただけで溝が埋まる訳ではない。彼は面白くなさそうな顔で、他のペアのストレッチを見ていた、その時だった。

自分の右腕に違和感を感じ、目をやると、

夥しいまでの螺子が突き刺さっていた。

『あ……うわあああああああああつつつ！！！！！』

絶叫が体育館に響き渡り、鼓膜をつんざく。自分の右腕を押さえ、激痛に顔を歪める彼を見て、明久はその時期の子供達が見せるような笑顔で微笑んだ。

「ね? 面白いでしょ?」

次の日から担任の女性教師は毎日放課後に明久とお話という名目の

相談に乗ることにした。

その日聞いたことは、なぜあんなことをしたのかということ。あんなこととは、当然体育での出来事だ。彼女の優しく諭すような質問に、明久は微笑みながらこう言った。

「『だって、こーちゃん面白くなさそうな顔してたから。』『だから、僕がされて楽しいことをしてあげたんです。』」

彼女は二の句が告げなかった。

その日はそれでお開きとなり、次の日。どうすれば明久を正常に戻してやれるのか思案していたところに、紙束を抱えた明久がやってきた。明久はその紙束を自分の担任の前に突き付けるなり、

「『確か、先生の子供ってこの近くに住んでるんですよね？』『そ

の子を………
楽しませてあげないので、『僕のことはほつといってくれ
ません？』」

脅迫した。

突き付けられた紙に書いてあったのはこの学校の教師のリストだっ
た。ただし、表沙汰になれば免職は回避できない、一発で検挙され
るような証拠の写真と一緒に記載されている。震える声でなんのつ
もりだ、と問い質すと、明久は周りの空間が歪むかのような邪悪な
表情で淡々と言葉を発した。

「『僕をほつとけば』 先生の子供は今まで通りに生活できて先生
は一人の生徒を見捨てたという最低最悪のレッテルを貼られる。』
『この紙束を受け取らなければ』 先生の子供の安否は約束できず、
自分の子供を見捨てたという最低最悪のレッテルを貼られる。』
『まさに鞭と鞭ですね。』」

その日以降、明久の周囲の状況は担任の女性教師にまで無視される

ようなものになった。

明久へのイジメが途絶えたと同時に、次のターゲットとなったのが、例の桜色の髪が眩しい少女——姫路瑞希である。

元々、その体型のせいで男子からよくからかわれ、『地味好き』という不名誉なあだ名で呼ばれていたのだが、明久との体育の様子の一部始終を見ていたクラスメイトによってそれが本格的なものへ昇華した。

明久にしたイジメを施し、その都度純粋な瞳に大粒の涙が流れる瑞希を見て、クラスメイトは安堵した。

安心したクラスメイト達はイジメを本格化し、間接的な暴力を振るうまでに至った。瑞希はただ膝を抱え、ニヤニヤと笑うクラスメイトと純粋に笑う明久を交互に見遣ることしかできなかった。

そして、暴力は直接的なものになろうとしていた。

その日、瑞希はとうとう校舎裏に呼び出された。人目のつかない場所をわざわざ選ぶ理由など、人目についてはまずいことになる以外にありえない。それでもその後の報復が怖い瑞希にとって、無視するという選択を選ぶはずがなかった。

いつかのように夕焼けが眩しい放課後。瑞希は足取り重く校舎裏へと向かった。担任の女性教師に相談しても、何かと理由をつけられて話を聞いてくれない。その顔はやつれたもので、人気があって頼りになるいつもの先生は影も形も消滅していた。頼りにできる大人もいない、両親に心配をかけたくない彼女にとって、この状況を打破することは到底不可能だった。

今日は両親にどんな言い訳をしよう——日に日に嘘が上手くなっていくのを感じながら、陰鬱に赴いた校舎裏は、

「『ひどいよ』『瑞希ちゃん』」

圧倒的な血に濡れていた。

『ひつ……！？』

クラスメイトが螺子によって串刺しにされている中、返り血を全身に浴びた明久が瑞希を見据える。明久の嫌悪感に気が付かない純粹さを持つ彼女でも、その惨たらしい構図は彼女を震え上がらせるに足るものだった。体に不似合いな螺子を持つ彼の表情は、相変わらずの笑顔に少し不満げなもの。次いで、彼の口から出た言葉は、到底瑞希に理解できないものだった。

「『僕の友達を盗らないでよ』」

吉井明久。

この話は、もしも彼が球磨川楔と同じ腐敗の人生を歩んでいたら、
という机上マイナスの空論を著したものである。

机上の空論（後書き）

【追記】

「君ってもしかして」の前書きを追加しました。

「大いに不満ですねえ」（前書き）

バカテスト・生物

第八問

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希、吉井明久の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。そして吉井くん。今ならカンニングと申し出れば許してあげます。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。工藤さんは真面目に回答していますよ？

須川亮の答え

『？女性　？幼なじみ　？女子高生　？若奥様　？幼稚園児』

教師のコメント

あなたの五大願望を聞いている訳ではありません。そして最後は犯罪臭どころかまんま犯罪です。

「大いに不満ですねえ」

戦場は不気味な程静寂していた。

先行部隊。試験召喚戦争、通称試召戦争が勃発し、授業が自習となつたせいで閑散とした渡り廊下には、秀吉を含むFクラス十数名が待機している。渡り廊下の窓から見える外の様子は相変わらずの晴れ模様で、平和そのものの中、今から起こりうるであろう戦争を見守っていた。

「では、もう一度確認するぞい」

先行部隊の部隊長である秀吉が、廊下の向こうを見張っている部隊員にも聞こえる声で最終確認に移る。最終確認とは、もちろんこの戦争に関する自分達先行部隊のDクラス戦での戦法についてだ。

「基本、二人組でDクラスを相手にするのじゃ。お互いがサポートするようにの。囃にしてはならん。余計な不和を招いてしまふのじゃ」

DクラスとFクラスの戦力差は当然Dクラスのほうが上である。そのため、数で勝負する戦法でうまく立ち回らねばならない。

「戦死を恐れる必要はないのじゃ。代表が言うにはこの戦争を長引かせるつもりはないらしいからの。補習室に連行されても、すぐに解放することを約束しよう」

補習室、という単語を聞いて身震いするFクラスの面々だが、後半の言葉で安堵のため息を吐いた。補習室とはかくも恐ろしい場所なのである。

「じゃが、全滅する気はない。初めDクラスを圧倒し、旗色が悪くなったらすぐに引き上げ、中堅部隊と交代。大まかな感じはこの通りじゃ」

『『『おうつ』『』『』

付け足しておくと、秀吉率いる先行部隊はDクラスの戦力を削ることと同様、Dクラスの戦力を分析する役目も任されている。単純計算なら3倍の戦力を持つ相手だが、それではあまりにも大雑把すぎるのだ。今後の作戦のためにも、正しい戦力差を把握することが重要だと雄二は考えていた。

「Dクラスだ！Dクラスが見えてきたぞー！」

見張り役の声で廊下の向こうに視線を向ける秀吉。見ると、Dクラ

スと思しき生徒が群れをなして自分達のほうへ走り寄る様子があった。

場の空気がぴりつとした緊張感に包まれる。Dクラスが自分達との距離を徐々に詰める様を目の当たりにした秀吉は、その接触寸前にて声を張り上げた。

「開戦の雄叫びをあげよ！迎え撃つのじゃ——！！！」

「土屋！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らし、廊下の向こうから美波が駆け寄り、現在の戦況を報告する。

中堅部隊。秀吉率いる先行部隊と本陣であるFクラスのちょうど中央に位置し、主な役割は時間稼ぎ、及び誘導。徐々に後退し、Dクラスの先行部隊を相手の本陣から引き離れた上で、こちらの本陣と回復試験を終えた先行部隊で撃退する、というスタンスが雄二の現段階での作戦だった。

この部隊に配置されているのは部隊長である康太とその補佐役の美波。隠密行動に長ける康太にとっては裏方に回りたいところだったが、すでにその必要はなくなったため、部隊長を任されていた。

「土屋、裏方の仕事はもういいの？」

「……………揃えるべきカードは全て揃えた。もうFクラスに敗北はありえない」

「す、すごい自信ね……………」

「……………（フツ）」

趣味が盗撮、特技が盗聴というRPGなら盗賊が天職の彼にとって、雄二の言うDクラスに勝つ布石を揃えることは造作もないのだろう。自分のクラスの勝利を早くも宣言する康太を見て、美波は戦慄した。

「ちなみに世界史の点数は？」

「……………18点^{フッ}」

「そんな点数で勝ちを確信できるなんて…………！」

別の意味で美波は戦慄した。

「……………それより、戦況」

「戦況？あ、ごめん、交戦状態に入ってたってことしか…………って土屋、何それ？」

「……………ICレコーダー。渡り廊下に仕掛けられた盗聴器を通して戦況を知ることができる」

「辞書みたいな説明はありがたいけどそれバツチリ法律に引っ掛かっているからね…………」

呆れの声を出す美波だが、康太がスイッチを入れると美波もさすがに口をつぐんだ。ザザザ…………とノイズが走るものの、康太と美波は流れる音声に耳を傾けた。

『さ……こい！こ……負……ぬが！……』

『で、鉄……ん！？い……だ！補……つだ……い……だ！……』

「うーん……ノイズのせいでよく聞こえないわね……なんとかならない？土屋」

「……………こればかりは、どうにも」

そう言いながらもカチカチとレコーダーを弄る康太。すると、その甲斐あってかどうかはわからないが、明確に聞き取れる程に音質がクリアなものになった。

『黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわかんが、たつぷりと指導してやるからな。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう！』

「……………」

「……………」

カチ、と康太がレコーダーを止める。美波が硬直している中、至って真面目な表情で康太はまじまじとレコーダーを見つめ、ぽつりと呟いた。

「……………使えるかも」

その声が耳に入った美波が涙目で激しく首を振っていたが、康太の目に映ることはなかった。

「ふむ……………」

埃っぽいFクラスの教室で、雄二は片手に持つB4の紙束を見て思考に耽っていた。

Fクラス本陣。言い換えるならFクラス最後の砦にて、雄二はどつしりと構え、見事な代表の風格を醸し出していた。それを感じ取っているのか、他のクラスメイト焦ることなく教室のドアの前で待機している。

雄二の持つ書類に書かれているものはこのFクラスの現状の戦力だった。あまりにもひどい。主戦力は瑞希だと言っていた雄二だが、瑞希一人で戦争に勝てる訳もない。他のFクラスの点数も重要になってくるため、こうして自分の点数を紙に書いて提出させ、康太にまとめあげてもらったのだが……ひどい生徒は自分の点数すら覚えてない始末。とりあえずその生徒は先行部隊という名の生贄になってもらった（秀吉は部隊長なので戦死の可能性は一番低いのだ）。

（ま、そうこなきや証明できねえからな）

雄二の言う証明。それは、この世は学力だけが全てではないということ証明することだ。雄二自身はなぜそんなことをするのか話したがないが、遠い目をして窓の外へ視線をやるその姿はどこか哀愁が漂い、過去になんらかの分岐点を越えてきたことが想像できる。その分岐点が、雄二に勉強をする目的を見失わせ、過去の栄光を廃れさせたのだろう。

こういった言い方だと雄二に不幸が降りかかったと思わせてしまうかもしれない。だが、雄二自身はそれでよかったと思っていた。その分岐点を越えてきたことで、今の自分があり、勉強よりも大切なことに気づけたのだと。

その雄二の歩んだ過去は、結果も過程も原因も全て異なるものの、それらとは別の何かが、かつての明久——球磨川楔と共通しているように見えた。

球磨川楔は——

「代表！先行部隊が後退を始めました！」

「ん？ああ。両クラスの被害はどうなっている？」

「こっちは残り4、5人程にまで削られたものの、Dクラスの先行部隊もおよそ半分くらい補習室送りにしたようです！Dクラス先行部隊は今もなお侵攻を続けています！」

「半分か……上出来だな。中堅部隊は相手を油断させるために先行部隊より数を減らしたし、明久を配置したいところだったが、まあ康太でも全滅は防げるだろ」

パサリと資料をちゃぶ台に置き、腰を上げる。立ち上がった雄二の表情からは漂っていた哀愁の色はすでに感じられず、溢れんばかりの闘志が漲っていた。

「本陣に告ぐ！俺達は一時間後に中堅部隊に合流し、敵先行部隊を

攻撃する！Dクラスの先行部隊は中堅部隊までは全滅させようと食
い下がってくるだろうからな」

『『『おうつ！！』』』

「だが、相手が撤退を始めたら深追いは禁止だ。本陣が出てくるか
もしれないし、敵先行部隊を全滅させてしまえば相手に警戒されて
しまうからな。相手が油断した隙を突き、最後はDクラスの首を取
る！」

『『『うおおー！！』』』

「では、各自戦闘準備にかかれ！ナメきったDクラスに敗北をくれ
てやれ！」

『『『おつしゃああああ——っつ！！！！！』』』

雄二の声に応え、最高潮にまで高ぶるFクラスの面々を見て、雄二
は思う。

自分の居るべき場所は、Fクラス（こゝ）に在る、と。

「『納得いかない』」

ちやぶ台ではなく、普通の教室にあるような椅子に座る明久が愚痴る。

回復試験会場。消費した点数はここで補給テストを受けることにより、回復することができのだが、戦争が勃発したばかりの今となつては、現在ここにいるのは無得点扱いの明久と瑞希、そして監督者である高橋洋子教諭の三人のみだった。

「吉井君、試験中は私語を慎むように」

「『だつてせんせえー』『今めちやくちや盛り上がってるところなのにそれに参加できないってめーちゃーくーちゃー萎えるんですけどー』『あーあ』『せえーつかく楽しいイベントの真っ最中なのになあー』」

「そういえば、相手はDクラスでしたか？確かにFクラスに姫路さんがいるのであれば振り分け試験直後といえどFクラスにも勝機はあるかもしれませんね」

チラリと瑞希に向けられた視線を追うように、明久もものすごい勢いでペンを動かす瑞希を見る。その表情はいつものおっとりとしたものとは正反対に、凜々しいという言葉が似合う顔つきだ。二人の会話に反応しない辺り、話が耳に入らない程集中しているということだろう。

「先生、次のテストをお願いします！」

「はい、どうぞ」

テスト開始からまだ半分くらいしか経っていないのに、瑞希はすでに三枚目のテストに取り掛かっていた。学年次席の頭脳は伊達ではないらしい。

「吉井君は、確か観察処分者でしたね。やはり畳にちゃぶ台は不満でしたか？」

「『大いに不満ですねえ』『と、言いたいところだけど』『僕個人としては畳もちやぶ台も好きですよ』『そもそも教室があるだけで残念ながら恵まれてますからね』」

「そうなのですか？なら、どうして戦争を？」

くあつと欠伸をする明久に高橋教諭が疑問を投げ掛ける。後頭部に手を組む明久は、その質問に答えることはなかった。

「『戦争を提案したのは僕じゃないですからねえ』 『まあ我らが代表エフゴリくんは打倒Aクラスを掲げてますから』 『ぶふっ』 『やばっ！自分で言ってる吹いちゃった！』」

「……Aクラスを、ですか？」

げらげらと笑い転げる明久を訝しげな目で見る高橋教諭。それはそうだろう。FクラスがAクラスを打倒しようなど、正気を疑いたくなるような話だ。

「……勝機はあるのですか？」

「『勝機？』 『ある訳ないじゃんそんなの』」

二度目の高橋教諭の質問に、今度はぴしゃりと言い切る明久。続いて明久から出る言葉は、およそ高橋教諭には理解できない言葉だった。

「『過負荷はくたかりはいつも負け続きですからねえ』『それでも勝ちたいから分の悪い賭けを楽しんでるんですけど』『まあこれだけは断言できるかな』『クラスが勝つても、僕が勝つことはありませんよ』」

「……では、負け続きだったあなたが、なぜ試召戦争を仕掛けたのです?」

そこで、明久はチラリと瑞希のほうを見た。彼女は今も懸命に問題を解き、クラスの手助けになろうと頑張っている。

その手助けになりたいと思っているクラスが、彼女のために戦争を仕掛けたということに気づかずに。

「『……………。』『さあ?』『エフゴリくんに聞けばわかると思いますけどね』」

明久の視線に気づいた高橋教諭がわずかに微笑む。教壇からこちらを見る高橋教諭のそんな表情に気づいた明久は、困ったようににこっと笑い、肩を竦めるのだった。

そして、次は明久の質問。

「『えっと』『なんで姫路ちゃんはあるのに問題を解けるんでせうか』」

ここ文月学園は時間有限、テスト無制限という制度を採用している。しかし、明久は憑依してこの文月学園の生徒となったため、そんな制度など知らない。

つまり、

「吉井君も見習ってくださいね。姫路さんに少しでも近づけるように」

「『はあ……』」

明久が落とす視線の先には、回答欄が全て埋められた一枚だけのテスト用紙。

高橋教諭も明久の質問の意図を正しく聞き取れていないせいで、彼にとっては的外れな返答になったのだった。

「戦争に犠牲はつきものよ」(前書き)

バカテスト・国語

第九問

問 死亡の反対語を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『誕生』

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

『復活』

教師のコメント

できません。

吉井明久の答え

『蘇生』

だからできません。

島田美波の答え

『虐殺』

教師のコメント

このクラスは実に様々な回答がありますね。とりあえず島田さんの『死ぬ』の反対が『殺す』という思考回路に鳥肌が立ちました。

須川亮の答え

『結婚』

教師のコメント

それ男性にとって人生の墓場じゃないですか。

「戦争に犠牲はつきものよ」

「島田にムツツリーニ！前線部隊が後退を開始したぞ！」

「……………総員突げ、」

「総員待避よ」

ところ代わって中堅部隊。暇を持て余しているといった感のFクラスの隊員達が報告係の言葉で色めき立つ。しかし、部隊長とその補佐の意見が真つ二つに分かれたせいで、出鼻をくじかれたように揃ってずっこけた。

「文句はないわね、土屋？」

「……………ない訳がない。先行部隊が全滅する」

「戦争に犠牲はつきものよ。帰還した後せめて黙祷を……………って土屋、何コレ？」

さっきのレコーダー越しに聞いた西村教諭の声で怖じけづいたので
あろう美波に、スツと裏返しにされた長方形の紙を突き出す康太。
つい条件反射で受け取った美波が表に目を向けると、それは全くブ
レのない綺麗な写真だということがわかった。

付け加えるなら、自分と明久が仲良く手を繋いでいる様子が写され
たもの、ということも。

「……………サービスでもう一枚つけてもいい」

「総員突撃い——っ！」

実にチョロい美波だった。

ちなみに康太のブラックリストに明久の名前が追加されたのだが…
…それはまた別のお話。

「おお、島田にムツツリーニ！はっ、はっ……………援護に来てくれたん
じゃな！」

DクラスとFクラスがぶつかり合い、ついに本格化してきた戦場の
向こうから息を切らした秀吉が走り寄る。かなり消費したのだろう、
美波と康太の前に来るなり膝に手について荒い息を整えるように深
呼吸を繰り返していた。

「……………！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「お疲れさま木下。大丈夫なの？」

指が擦り切れるかと思う程カメラのシャッターを切る康太に代わって美波が質問する。今の秀吉を見て、相当厳しい戦いで疲れ切ったのだと思ったのだろう。

だが、美波の予想に反し、最後に一つ大きな深呼吸をして秀吉は顔を上げた。その表情は疲れの色こそ見えるものの、何かをやり遂げたような達成感があった。

「うむ、戦死は免れておる。とは言え召喚獣はもうへろへろじゃがの。かなり削られてしまったのじゃ」

「そっか。あっちの先行部隊は？」

「大体半分くらいは削れたと思うぞい。では、ワシは雄二に用があるでの。島田達も頑張ってほしいのじゃ」

「あ、うん。お疲れさま」

うむ、と頷いてFクラスの教室へと去っていく秀吉。それに続くようにFクラスの先行部隊も帰還していくが、どう見ても戦争前より数が少ない。やはり、それ程厳しい戦闘だったのだらう。

次は自分達の番だ、そう思っただけを向く。突撃を浴びていたさつきとは違い、今の美波には充分なやる気を感じられた。自分も戦闘に加わりうと思った、その時。見知った顔と目が合った。

「あつ！やつと見つけましたお姉様！先生、こっちです！」

「み、美春！？あんたもう立ち直ったの！？」

「当然です！もちろん、お姉様とブタ野郎のあの光景を見て首を吊りそうになったのは事実です！」

「重っ！あんた高校生のくせになんて重い恋愛感情抱いてるのよ！？」

「ですが、美春と美紀さんは気付きました……」

美紀、というのはおそらくあの三つ編みの女子生徒のことだらう。この二人を放っておくとロクな結論に行き着かない、と美波が顔をしかめるが、そんなことを気に留めることなく美春は言葉を続けた。

「そう……奪われたのなら——寝取ってしまえ、と!!」

「考えうる限り最悪の結論に行き着いたあ——っ!？」

つくづく苦勞している美波だった。

ちなみにその構図を想像した康太が鼻血の海に沈んだのだが……それもまた別のお話。

「ふふふ……今なら保健室が空いてることも確認済みです。そしてお姉様としっぽりするんです!」

「しかも計算高い!?!いい加減ウチのことは諦めてよ!」

「はい!諦めます!既成事実さえ作ってしまえばこっちのものですから!」

「あんた既成事実の意味知ってるの!?!女の子同士じゃできないでしょ!?!え、なに、それともウチがおかしいの!?!」

「お姉様あー！美春の愛を受け止めてくださあーいつ！試獣召喚サモンつ！」

「くうう……！殺らなきゃやられる……殺らなきゃやられる……！
サモン！試獣召喚つ！」

二人の喚び声に反応し、幾何学的な魔法陣が浮かび上がる。やがて光と共に美波の前に現れたのは、まさしく美波そっくりの『召喚獣』。

教師の立ち会いの下にシステムが起動し、召喚者の喚び声に応えたその姿は、表現するなら『デフォルメされた島田美波』という感じだろう。身長こそ小さいものの、軍服姿にサーベルを持つその姿は実に戦争に適した姿と言えるものだった。

目線を前に向けると、同じく美春が召喚したと思われる召喚獣が剣を正面に構えている。かと思いきや、その直後、剣を振りかぶりつつ突進してくる。明らかに美波の召喚獣を倒すつもりだろう。

ここは避けたいところだったが、条件反射と操作の経験不足のせいで美波は刀身の細いサーベルで受けてしまった。ぶつかり合う武器にいかにも劣勢の自分の召喚獣を見て、美波の表情が苦悶に歪む。

化学

Fクラス 島田美波 53点

V S

Dクラス 清水美春 94点

続いて表示される点数。予想通り、美波の不利は火を見るより明らかだった。その上体勢も不利なものになってしまったせいで鏢競り合いの拮抗は長く続かず、ついに美波の武器が弾かれてしまう。

倒れ込んだ美波の召喚獣の首元に突き付けられる美春の剣。下手に動けばすぐに戦死させられるだろう。

美波の負けだ。

「さあお姉様！美春と保健室に行って共に愛を育みましょう！ハアハアハアハア……！」

「つ、土屋あ！助け——」

と、美波の助けを呼ぶ声は途中で遮られた。

「……………試^{サモン}獣召喚」

ムツリーニ
寡黙なる性職者。その静かな声は妄想に耽る美春の耳に届かない。
美春の死角から呼び出された康太の召喚獣は、両手に一本ずつ握る
小太刀を閃かせ、

「あ、あぁっ!？」

化学

Fクラス 土屋康太 28点

V S

Dクラス 清水美春 0点

美春の点数を残さず刈り取った。

「助かったわ土屋……！西村先生！戦死者です！ここにきてくだ
さいっ！」

「ん？おお清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ……」

近くにいた西村教諭が美春の襟首を掴む。召喚獣が戦死した生徒は

戦争が終わるまで補習室で特別講習、というルールの下、そのまま補習室に連行ということだろう。美波の召喚獣は負けただけで戦死しなかったのは不幸中の幸いと言える。

「くっ、お姉様！美春は諦めませんか！美春はお姉様を運命の赤い鎖で繋ぎ止めるんですからね——っ！！」

「お願い美春！それただの監禁だって気づいて！できれば犯罪だってことも気づいてえっ！」

危険な発言を残し、美春の姿がどんどん小さくなり、ついに消えた。たった一人相手にしただけなのに膨大な疲労感が美波を襲い、思わずその場にへたり込む。

戦場の勇ましい声がどこか遠くに聞こえる中、ポンと肩を叩かれた。ゆっくりとそちらに目を向けると、康太が自分の肩に手を置いている。

「……土屋……」

「……………（コクリ）」

ただ頷いただけで皆まで言うなと言われていた気がする。康太の全てわかっている、というような表情を見て、美波は自分の内側から

込み上げてくるものを感じた。

「……………貸し一つ。返却は被写体で」

どう考えてもただの悪寒だった。

「これはきつと悪い夢だ」(前書き)

バカテスト・日本史

第十問

問 豊富秀吉が農民の一揆を防ぐために行った政策の名称は、あるものを農民から取り上げたことにより名付けられた。政策の名称を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『刀狩り』

教師のコメント

正解です。他にも太閤秀吉が行った政策は『太閤検地』などがありますね。

土屋康太の答え

『角刈り』

教師のコメント

シニールですね。

島田美波の答え

『いちご狩り』

教師のコメント

農民が大喜びですね。違う意味で一揆が防げそうです。

吉井明久の答え

『こんなのひどすぎるよ……』

教師のコメント

何かあったのですか？吉井君が悩むなんてとても珍しいことですが、テスト中は集中しましょう。

「これはきつと悪い夢だ」

戦争を制するために、必要な条件は三つある。

一つ目は軍事力。この試召戦争に置き換えるなら戦力、学力と言っているだろう。一人一殺がまかり通るならば人数は多いに越したことはないし、単純な力比で勝敗が決するのであれば点数は多いほうが断然優位に立てる。Fクラスの圧倒的不利な立場は、この学力不足が原因だろう。

二つ目に地形。だが、この試召戦争に至っては三つの指に入る程の重要性を秘めているとは言えない。あえて言うのなら兵士、すなわち生徒のコンディション及びモチベーションが挙げられる。

つまり、十分な自信と多大な戦意が組み込まれることにより、長期戦において我慢強さが発揮されるのだ。絶対負けなという自信と必ず勝つという戦意は、時に千載一遇のチャンスと呼び込む切り札となる。

そして三つ目——統率力。先に挙げた二つの条件は、優秀な軍師により2倍にも半減にもされたりする。古代中国の歴史書からも読み取れるように、たとえ豪傑な兵士が揃っていようと烏合の衆とかなりえないこともある。

今挙げた三つの条件の強弱、高低、優劣により、戦争の勝敗は決定

されると言えよう。

『ムツツリーニ！横溝がやられちまった！これで布施先生側は残り二人だ！』

『五十嵐先生だが、現在俺一人しかいない！援軍を頼む！』
『藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！』

中堅戦。

Fクラスは想像以上に苦戦を強いられていた。次から次へと届く良くない報せがFクラスの戦意を削ぎ、Dクラスの自信を向上させるという悪循環が生まれてしまっている。

こういった場合に、康太はFクラスをまとめあげることができない。雄二のような大きな声を出すことも、明久のように士気を高めることも苦手なのだ。Fクラス全体の統率は雄二が取り仕切っていたために問題はなかったが、この中堅戦において、康太は美春を戦死にしたこと以外に目立った戦果を上げていなかった。

将としての素質。単独行動や極秘調査、情報操作などの暗躍の系統が得意な康太にとって、数少ない弱点と言っていいたろう。

だが、

「布施先生側は防御に専念よ！五十嵐先生側はゆっくり後退していいからね。藤堂は……残念だけど諦めましょう！」

『『了解！』』』

そのことを雄二が把握していない訳がない。補佐の美波が代わりに指揮を取ることに、Fクラスの戦意はなんとか持ち直した。

とは言え、このままではギリ貧だ。Dクラスもかなり消耗しているが、それ以上にFクラスの被害も看過できない。ここが正念場と悟った康太は、ついに用意したカードを切ることを決意した。

「……………須川」

「ん？呼んだか、ムツツリーニ！」

「……………須川に情報操作をしてきてほしい」「情報操作？それはいいが……………Dクラスの部隊長は声が大きいから、あんまり意味はないんじゃないか？」

Dクラスの先行部隊を取り仕切っているのは塚本という男子だった。康太に比べて声も大きいし、雄二程ではないにせよ統率力もある。自分の部隊が混乱に陥ったとしても、彼によってたちまち態勢を立

て直されることがだろう。

そのことを知っているにもかかわらず、康太はフツとニヒルに笑い
つつ一枚のメモ用紙を須川に差し出した。

「……………問題ない。この内容を放送してほしい」

「ん……………？こ、これはっ！？」

訝しげにその紙を受け取る須川。しかし、紙に書いてある内容を見
た途端、笑いをこらえるように表情を一変させた。

「よし、任せとけ！確実にやり遂げてみせる！」

嬉々として走り去る須川に親指を突き出す康太。その様子を見た美
波は首を傾げた。

「土屋、なんて指示したの？」

「……………今にわかる」

「うーん……………」

いつもの無表情に戻った康太からは曖昧な返答しか返って来ず、美波の疑問が取り払われることはなかった。

『塚本！このままじゃラチがあかない！』

『もう少し待っている！今数学の船越先生も呼んでる！』

後退しながらも拮抗した状態を維持してきたFクラスにとって好ましくない情報が耳に留まる。教師の立会人を増やして戦線を広げ、早々にこの中堅戦に終止符を打つつもりなのだろう。早く終わらせたいのはFクラスも望んでいることだが、それが自分達の敗北で終わるのなら、当然話は別だ。

「土屋！これ以上戦線を広げられたらひとたまりもないわよ！」

美波の言う通り、戦闘開始直後はFクラスに人数のアドバンテージがあったものの、今となつては次々と戦死し、人数においてDクラスと五分五分になっていた。もちろん点数はDクラスのほうが高いので不利なことこの上ない。

「……………問題ない。それに、こんなことわざがある」

しかし、自軍の不利を気にすることなく、康太は不敵に笑った。

「……………『海老で鯛を釣る』。すでに、手は打った!」

自信に満ち溢れた表情で宣言する康太。その直後、変化は起きた。

ピンポンパンポーン

《連絡致します》

「校内放送?それにこの声……………もしかして、須川ね!?!」

コクリと頷く康太。それを見た美波は、期待に満ちた目で天井の放送機器に目を移した。

《船越先生、 船越先生》

「『ん？』 なにこれ？』 『ってか僕の出番がなさすぎていい加減萎えたんだけど』」

「これは……校内放送ですね」

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「『はい？』 なにこれとっくにいってっ？」

《生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです》

「ええっ！？ま、まさか吉井君、船越先生に脅されてるんですか！？」

「『あーはい』『とりあえず船越って先生がどんな人かよくわかりました』『あ、そっか！』『これで回復試験抜け出せてことね！』『それじゃあセンセ、ちよっと一世一代の告白してきまーっす！』」

「よ、吉井君！？まだテスト時間で――」

《続いて、2 - D 玉野美紀。2 - D 玉野美紀。Fクラスの男の娘、吉井明久から伝言です》

「『……………。』『え、男の娘？』」

《あーあー…………『玉野さんこんにちは』『僕の名前は吉井明久です』》

「あら？この声…………吉井君？」

「『……………。』『あははまっさかー』『まさかね、

うん。これはきつと悪い夢だ」

《『玉野さん。』『僕と契約して、蠅人形にしてよ!』『』》

「『ちよつとお——っ!?!』『なにこれえっ!?!』『なんで僕の知らないところで僕の命のやり取りがされてるのお——っ!?!』『』」

《『……以上です。ちなみに吉井明久はFクラスにいますので、道中Dクラスを蹴散らしてきてくださいーい』》

「『破綻してる!』『今聞いただけで僕が4人もいるよ!』『もうヤダ訳がわからないよ——っ!?!』『』」

「お、おい、聞いたか今の放送……」

「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ……」

「あんな確固たる意思を持った連中に勝てるのか……？」

とDクラス。

「吉井……！あいつ、俺達のために……！」

「間違いねえ……あいつは漢おだぜ……っ！」

「まさかクラスのためにそこまでやってくれるなんて……！！！」

とFクラス。

明久の犠牲が実に戦場の良い影響を与えていた。

「土屋あんた……鬼ね」

「……俺は異端者に制裁を加えただけ。死神と呼んでほしい」

「そっちのほうが悪い意味だからね……」

実際に玉野という女子に追いかけられた美波だからこそわかる恐怖

だった。明久の無事を心の底から祈っていると、さらにFクラスにとって吉報が聞こえてきた。

『たっ、大変だ！近衛部隊の玉野が反逆した！！』

『『なにいつ！？』』

「……………フッ。計算通り」

「…………犠牲にした人は敵と一緒に徹底的に地獄に叩き落とす土屋さん、マジばないわ」

戦況が好転したはずなのになんでこんなに涙を誘うんだろ…………と感慨深げに窓の外を見る。とりあえず自分がさっき言った『戦争に犠牲はつきもの』という言葉撤回するところから始めよう、と反省する美波だった。

『玉野は本陣が抑えてくれている！急いでケリをつけるぞ！』

『吉井の犠牲を無駄にするな！吉井の弔い合戦だ！』

『『『うおおおおおおお———つつつ！…！』』』

DクラスとFクラスのその言葉を皮切りに、Dクラスの侵攻が熾烈を極め、Fクラスの士気が最高潮に突入する。いよいよ中堅戦が終わりに差し掛かる中、遠くからよく通る声が聞こえてきた。

「康太！島田ー！あと少し持ちこたえろ——！」

その言葉に後ろを振り返ると、雄二が本隊を引き連れてこちらに押し寄せるのが見えた。待ち望んだ援軍がようやく来たらしい。

『援軍だ！合流する前に全滅させる！厄介なことになるぞ！』

ここが正念場だと感じたのか、とうとう捨て身の攻撃に出るDクラス。補習も恐れず、自分の点数が消費していくにもかかわらず特攻を続ける。雄二率いる本隊はまだ遠く、間に合いそうもない。

『残り二人だ！トドメを刺せ！』

「く……っ！させないんだから！試獣召——」^{サモ}

ン、と召喚の言葉を口にしようとした美波の口が横から伸びた手によって制される。驚きの表情でそちらに視線を向けるが、当然そこ

には康太しかない。

『中堅隊隊長、覚悟しろっ!』

敵の召喚獣が迫る中、康太は――第二のカードを切った。

《黙れっ!!!!!!!!!!》

「ひっ!?!」

ビリビリと窓が震える程の怒声が響き渡る。Dクラスの生徒はその声に怖じけづき、足を止めていた。

「……………試^{サモン}獣召喚」

化学

Fクラス 土屋康太 28点

V S

Dクラス 野口一心 43点

康太が召喚し、点数が表示される。相手のDクラスも消耗しており、あまり大差ない点数同士が浮かび上がった。

「く、くそ――」

《捕虜は全員》 《補習室で特別講義だ!!》

「もしかしてこの声……鉄人!？」

よく見ると、康太の手には先ほどのレコーダーが握られていた。あれで採取した音声を再生していたのだろう。音の大きさも違う辺り、音量も調節してるようだ。

《補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう!!》

「ひ……っ!!」

Dクラスが後ずさる。さすがは補習室の鉄人、効果は抜群のようだ。

カチ。

《たっぷり勉強漬けにしてやるぞ……》

カチ。

《たっぷり勉強漬けに》

カチ。

《たっぷりと》

カチ。

《たっぷりと》

カチ。

《たっぷりと》

……カチ。

《補習室で特別講義だ……!!》

『うわあああああつ！！』

『嫌だっ！補習は嫌だあつ！！』

『あんな拷問耐えられる気がしねえよお——っ！』

『し、し、しっかりしろ！で、撤退！撤退だあ——！！』

恐怖のあまり、クモの子を散らすように逃げ出すDクラス。雄二率いる本隊が到着した頃には、すでにDクラスの生徒は全員逃げ去った後だった。

「なんだ、俺達が必要なかつたみたいだな……康太、よくやった」

「……………（グッ）」

満面の笑みで親指を突き出し合う雄二と康太。その様子を見た美波の中の、『友情』という言葉の定義が崩れ去る中。

台風が過ぎ去った後のような静けさが漂う戦場を後にしたのだった。

「世知辛い世の中だよねえ」(前書き)

バカテスト・化学

第十一問

問 抵抗が非常に大きく、ほとんど電流が流れない物質を何と
言いか答えなさい。

姫路瑞希の答え

『絶縁体』

教師のコメント

正解です。簡単でしたね。

吉井明久の答え

『ゴム』

教師のコメント

ワンピースの見すぎです。

土屋康太の答え

『千鳥』

教師のコメント

NARUTOの見すぎです。

島田美波の答え

『絶炎帝』

教師のコメント

読み方は合っていますが、実は島田さんもジャンプ派の方ですか？
いえ、漢字がどうも必殺技のような並びでしたので。

「世知辛い世の中だよねえ」

「明久。回復試験、よく頑張った」

「『……………』」

Fクラス。返ってきた合計10枚のテストの束を見つめていた明久は、出会い頭にいきなり祝福の言葉をかけられた。

にもかかわらず、明久は沈黙をもって返答する。改めて顔を向けると、そこには雄二の満面の笑みがあつた。

実に幸せそうな表情だ。なぜそんな表情なのか、明久はその原因を確信していた。

「『校内放送、聞いてた?』」

「ああ、バッチリだ!」

「『オーケーわかった』 』ちょっと臨死体験でも逝ってみようか』」

サムズアップの雄二。爽やかすぎるその表情はどう考えても明久の不幸を嘆いているどころか喜んでいる。

はあ、とため息を吐きテストを鞆にしまう。ごみ箱に突っ込んでやりたい気分だったが、それよりも聞きたいことがあった。

「『でさあ雄二くん』 結局あれなんだったの？』 僕の声を手を使ってさあ」

あの校内放送の声は、確かに明久のものだった。だが、自分はあること言っただけ記憶などない。

「ああ、ちょっと秀吉に頼んだんだ。あいつの声真似は目を見張るものがあるからな」

「『声真似かよ』 『はあーあ、全くなんて迷惑なキャラなんだろうなあ』」

つまり、雄二が言うには秀吉が明久の声を真似たらしい。それである放送をしたのか、と明久は納得した。

「それより明久、テストは本当に真面目にやったのか？」

「『一応ねえ』『まあ不真面目マイナスが売りの僕としては甚だ不本意だったけど』『全教科間違はなく百点満点だよ』」

全教科百点満点。それは素晴らしい成績のはずだが、雄二の反応はイマイチのものだった。

「ま、明久にしちゃよくできたほうじゃないか？今からDクラスに奇襲をかけるからお前も準備しとけよ」

この時点で、明久はようやく確信した。

瑞希がなぜあんなにたくさんの問題を解けたのか。なぜ百点満点で満足されないのか——つまるところ、それは百点が満点ではないということだろう。

文月学園が採用しているテスト形式は時間有限の問題数無制限。そのことによりやく気づいた明久だった。

見たところ、瑞希は全ての教科において最低3枚はテスト用紙の回答欄を埋めていた。その全てに丸をもらえたなら、300点。

たかが百点では、雄二がいい顔をしなかったのも当然だろう。

「『ま、別にいつか』」

『百』という点数がAからFのどのランクに位置づけられるのかはわからないが、別に戦えるのならそれでいい。

そもそも、吉井明久は不満だったのだ。

『パーフェクト全教科満点』など、マイナス過負荷である自分にとってあまりにも不似合
いすぎる。昔の知識が未だ頭に残っていたせいで全ての空欄を埋め
てしまったが――

「『世知辛い世の中だよねえ』 『パーフェクト僕の満点なんて、マイナス所詮低得点って
訳かい』」

相変わらずの自分の最低つぷりを間近に見せつけられ、明久は相変
わらずの笑顔を自分の顔に張り付けたのだった。

『Dクラス塚本、討ち取ったり！』

下校する生徒に混ざるFクラスがDクラスの生徒を次々と挟み撃ちにし、まさしく乱戦という言葉の中で一際大きな声があがる。

今回の奇襲には雄二率いる本隊に、その他全てのFクラスが動員されていた。この奇襲で戦争を終わらせるつもりなのだろう、Dクラスの部隊長を討ち取ってもFクラスの快進撃が止むことはなかった。

「『わーお』『みんな頑張ってるねえ』」

そんな中、頑張っていないFクラスの生徒がただ一人。この口調は言うまでもない。明久だ。どうやらこの戦場に身を投げ出すつもりはないらしい。

『ついにDクラスの本隊が動いたぞー！』

誰が叫んだのか、とにかくその声が聞こえた。その途端にキョロキョロと辺りを見渡す明久は、誰かを探しているように見える。言う

までもなくDクラスの代表だろう。

おいしいところは全部掻っ攫う。腐った信条を心に宿す明久が考えていることは、Dクラス代表の首級だけだった。

「ここは一旦退くぞ！下校中の生徒に混ざって攪乱するんだ！」

だが、雄二のよく響く声を聞く限り戦況はFクラスが不利のようだ。声のほうに視線を移すと、雄二を囲むFクラスの生徒達をさらにDクラスと思われる生徒が囲っていた。

自分達の不利に形勢を立て直すつもり雄二は徐々に後退していく。

『逃がすな！個人戦なら負けはない！追い詰めて討ち取るんだ！』

Dクラスの代表らしき人物の声。全体の指揮を取っているので間違いないだろう。

今の雄二とは裏腹に、こちらは追撃に移り戦争を終結させるつもりらしい。

だが、当然それには将たる代表の側を離れて敵を追い詰める必要がある。

そして、その追い討ちに戦力を割くならば、自分の防備が薄くなるのは自然の理、当然の結果だった。

「『チャンス！』 Dクラスの代表くんに吉井明久が、」

「Dクラス玉野美紀、サモン試獣召喚っ！」

「『……げっ』」

こっそりとDクラス代表に近づいた明久だが、突如現れた近衛部隊に阻まれる。いくら防備が薄いとは言え、さすがに丸腰ではなかったようだ。

その上明久の前に現れたのはいつぞやの女子生徒。相変わらずの煌めいた視線を向けてくる玉野という生徒を見て、明久は後ずさった。

「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

「『おいおい照れるぜ』 みんなに祝福してもらってほんと苛立たしいな』」

「明久く——アキちゃんっ！さっきはFクラスに行けなくてごめんなさいっ！」

「照れなくてもいいじゃないか。ついでに俺達Dクラスからの祝福も受け取ってくれるかい？」

「『お断りしておくよ』『罵倒慣れしてる僕達^{マイナス}からしたら』『祝福なんて恐れ多いし腹立たしいしね』」

「でもねでもねっ、大丈夫だからっ！きつとアキちゃんはフリルのついたスカートとか似合うからねっ！」

「……………。なら、無理矢理にでも祝福するだけさ。Fクラスのお前相手じゃ勝敗は目に見えてるからね」

「『……………。』『さあ、どうだろうね？』『足元掬われないように精々気をつけなよ』」

「他にもねっ？いろいろ用意するから！ドレスとか、スカートとか、胸パッドとかコルセットとか——スク水とかっ！」

「『アウトお——っ！』『最後は絶対アウト！』『玉野ちゃん考え直せそれ犯罪だから！』」

「あ、アキちゃんが名字を呼んでくれた……っ！う、うんっ！ふっつか者ですがっ、よろしく願いします！夜は優しくするからね！」

「玉野さん落ち着いてくれ！会話が成立してないしなんでいきなり両想いみたいな結論に行き着いたんだそれに玉野さんが夜は優しくするほうなのかっ！？ぜえ……ぜえ……」

ある意味最強の玉野美紀だった。

そのせいもあつたのだろう。Dクラス代表、平賀源二が気づくことはなかった。

後ろから忍び寄る………というと語弊があるかもしれない。

頼りない足取りで、おどおどとした様子で近づく——最大の脅威に。

「あ、あのっ」

「え？あ、姫路………さん？」

振り返る平賀。その雰囲気には敵意の類はない。

それはそうだろう。瑞希の学力は彼女の学年の誰もが知っていることだし、当然Aクラスだと思って疑い無いはずだ。

しかし、現実には非情なものである。

「『あつ姫路ちゃん』『ちょっとこっちはこっちでお取り込み中だからさ』『あとはよろしくね』」

「あつ、は、はいっ！あの、Dクラス代表の平賀くんに勝負を申し込みます。Fクラスの姫路です」

「あ、こちらこそ……」

現実とは、非情なものだ。

学年次席の得点を取っても、現実では最低クラスに振り分けられてしまった瑞希。

その事実気づかず、目の前の最大の脅威にただ啞然とするしかない平賀。

そして、死の淵より謎の生還を遂げ、赤の他人に憑依することになった――楔。

「さ、試獣^{サモン}召喚ですっ」

現代国語

Fクラス 姫路瑞希 339点

VS

Dクラス 平賀源二 129点

「え？あ、あれっ？」

「う、ごめんなさいっ！」

瑞希によつて召喚された召喚獣は他とは比べものにならない程に豪華なものだった。

身長のはあるつかという大剣。それを軽々と持ち上げるとのこととは、当然驚くべき筋力も持ち合わせているということだ。

重量溢れる武器を持っているにもかかわらず信じ難いスピードで肉薄する瑞希の召喚獣。やがてその圏内に入った平賀の召喚獣を——
一刀両断した。

『Dクラス代表平賀源二、討ち死にだあ——っ！！』

学園を揺らがした戦争の行方は、今ここにFクラスの勝利で終結した。

「『あーあ』結局僕は何もしなかったなあ』『これじゃ勝ったなんて言えないよ』」

Fクラスの歓喜が渦巻く中、ただ一人不満げに口を尖らせる明久。

思い返してみれば、明久がFクラスの生徒と同じ反応を示したことは何一つなかったと言っていていいかもしれない。

それこそが――

「『また勝てなかった』」

ノーマル
Fクラスと吉井明久の、マイナス決定的な違いなのかもしれない。

とは言え――

「アキちゃんアキちゃんっ！それじゃあ早速スカートから――っ

てどうして逃げるの！？待って！アキちゃん待ってーっ！」

「『ちくしょおっ！』『せつかくいい感じの少年ジャンプみたいな
終わり方だったのに台無しだっ！！』『」

未だ自分の中の戦争が終わらずに逃走を開始する彼は、

非情の渦巻くこの世界の、至って普通の生徒と言えないこともない
のかもしれない。

「お前もか」(前書き)

バカテスト・世界史

第十二問

問 () を埋めなさい。

『主にエジプト人は靈魂の不滅を信じており、死者をミイラとして保存して死者の来世の祝福を願って生前の行為の弁明を記した()を埋葬した』

姫路瑞希の答え

『死者の書』

教師のコメント

さすが姫路さん。その通りです。

土屋康太の答え

『エロ本』

教師のコメント

それは生前の行為ではなく生前の願望です。というか埋葬されるほ

うが迷惑でしょう。

吉井明久の答え

『ラブレター』

教師のコメント

思考が土屋君と全く同じです。

島田美波の答え

『殺戮の書』

教師のコメント

どうして『殺戮』なんて難しい漢字を知っているのですか？どちらにせよその人の来世はきっと祝福されないでしょう。

須川亮の答え

『須川亮のモテる秘訣大特集』

教師のコメント

おそらく成長した須川君が死ぬ間にそれを見れば悶絶すること間違いないと思います。

「お前もか」

ほとんどの生徒が下校し、殺風景な廊下を一人トボトボと歩く明久。その足取りは覚束ないもので、いかにもマラソン10キロ走ってきましたと言わんばかりの疲労が目に見えて纏わり付いているようだった。

「『やつと玉野ちゃんを撒けたよ……』『もうほんとなんなのこの学園』『まさかの登校一日目にして不登校?』」

登校拒否はこうして生まれていくのか、と少し的外れな思考に頭を悩ませながら夕日の強い光の中を進む。

やがて、時間がかかったもののなんとか自分のクラスに辿り着く。一刻も早く帰ってベッドにダイブしたい明久は、鞆を回収するために勢いよくボロボロの扉を開けた。

「よ、吉井くん!？」

「『おろ? 姫路ちゃん?』『何してんのこんな時間に』」

すでに全員が帰宅し、無人だと思っていた教室には瑞希が一人、座布団に座ってペンを走らせていた。

「ど、どうしたんですかつ？」

慌てた様子で今まで書いていた紙を隠そうとする瑞希。明久が瑞希のちゃぶ台に目を向けると、紙というより可愛らしい便箋が広げられていた。

「こ、これはですね、あの、えっとっ」

「『まあまあ姫路ちゃん』『とりあえず落ち着かない?』『』」

「その——ふあっ」

コテンとちゃぶ台にぶつかって尻餅をつくように転ぶ瑞希。

その拍子に瑞希の抱え上げた便箋が彼女の手を離れ、明久の目の前に落ちた。

《《あなたのことが好きです》》

便箋……というよりここまで来ればラブレターと言ったほうがいいだろう。その文面にはその一文だけが書かれていた。

学年次席の成績を持つ瑞希だが、その他にも可憐な容姿で学年問わず男子生徒に人気がある。もし彼らがこの一文を見れば、たちまち絶望の淵に叩き落とされることだろう。

だが、明久がそんな事態に陥ることはなかった。

「『うわお！』『水色ごちそうさまです！』」

「え……き、きやあつ！？」

ラブレターよりも大事なもの^{パンツ}の優先の明久だった。

すかさずスカートを押さえて瞬時に距離を詰めてきた明久の背後にある便箋を回収する瑞希。顔を初々しく赤く染めたまま、恐る恐る尋ねる。

「……あの、見ました、か？」

「『そりやあもう！』『すごく可愛いパンツだったよ！』」

「そ、そうじゃなくて！ううう……わ、忘れてくださいっ」

「『もう永久保存しちゃったよ』 『いやあ疲れも吹き飛んじやったなー！』」

赤い顔をさらに紅潮させる瑞希に頭の中で先程の光景を無限ループさせる明久。

しかし、思ったより瑞希が恥じらうことはなく、それどころかクスリと微笑を浮かべた。

「『うん？』 『どうしたの姫路ちゃん？』」

「あ、いえ。 ちょっと安心しちゃって……」

「『安心？』 『さっき書いてたの、そんなに大事なことだった？』
『パンツに夢中で見えてないから安心していいよ』」

「えっと…… もちろんそれもあるんですけど……」

困ったように笑う瑞希。才色兼備に加え、この穏やかな性格だ。学園の男子がほとつかないのも無理はないだろう。

同年代の男子にここまでパンツパンツ言われるなど、もはや軽蔑を

通り越して恐怖ものである。

「ちゃんと吉井くんは女の子に興味があったんだと思うと……安心しちゃいました」

「『……うん？』『なんか妙にひっかかる物言いだけど』『こう見えて僕、パンツと聞いたら目がなくてね』」

女子生徒相手に自爆宣言を布告し続ける明久だが、瑞希が気にするようなそぶりは見せない。それどころか、さらに安堵した様子で、

「よかったです……私の友達が『やっぱり吉井くんは受けよね』って言ってたので……」

明久の自爆を遥かに凌駕する核爆発を引き起こした。

瑞希の言葉に一瞬で笑顔が固まる明久。

強張った表情のまま、明久は誰に聞かせる訳でもなく思わず口を開いた。

「『姫路ちゃん、お前もか』」

はい？と首を傾げる瑞希を置いて、鞆を引つ提げトボトボと教室を後にした明久。

道中に『夕日が目に染みるぜ……』と呟いた明久の背中が、ひどく哀愁に満ちていたのは言うまでもない。

「お前もか」(後書き)

『机上の空論』の最後の部分を修正しました。

感想お待ちしております！。

「いちそうさま。」（前書き）

バカテスト・数学

第十三問

問（１）以下の命題の真偽を答えなさい。（２）また、その逆と対偶の真偽を答えなさい。

『 $a \parallel 15 \downarrow a \parallel 3$ かつ $b \parallel 5$ 』

姫路瑞希の答え

『（１）偽』

（２）逆…真 対偶…偽』

教師のコメント

その通りです。命題の逆、裏、対偶の真偽はしっかりと頭に入っているようですね。

土屋康太の答え

『（１）真偽のどちらか』

教師のコメント

どっちか書いてください。

吉井明久の答え

『(2) ↓ 解答へ進む』

教師のコメント

進みません。

「いっせーいっせー。」

——翌日。

この日、Fクラスは次の試召戦争に向けて全員が補充テストを受けていた。

カリカリというシャーペンが滑る音を聞きながら明久は、

「『いやー感無量だなあ！』『こつちにもジャンプがあるなんて！』『やっぱりジャンプは世界を越えて愛されてるんだねえ！』『コレがなかったら僕、いつもの調子の半分くらい削がれてたって言うてもきつと過言じゃないと思』」

『『『ちよつと出てけ』』』

あつさりと教室から閉め出された。

とは言え、念願の雑誌ジャンプを読むことができた明久の気分が沈むことはない。そのままウロウロとジャンプ片手に廊下でほっつき歩き、やがて腰を下ろして読み耽ること数十分。

週間雑誌というものは大抵早々に読み終わるものである。最後のページを読み終えたと同時に、顔を上げた明久はこちらに同じ高さの視線をくれる生徒に気がついた。

「……あ」

「『………？』 『僕になんか用かい？』」

「……うん。廊下に座る人、初めて見たから。どんな感じが試してみたかった」

透き通るような声に嘘偽りない美少女だった。光を反射するような黒髪長髪に白魚のような真っ白な素肌。そんな見目麗しい生徒が明久の向かいの壁に腰掛けて座っていた。

ジャンプを脇に差し、立ち上がる。すると、明久のその動作に反応したように目の前の黒髪の美少女も立ち上がった。

「『まっ好きで座ってる訳じゃあないんだけどね』 『廊下の座り心

地はどうだった？』」

「……冷たかった」

だろうね、と言葉を投げ掛けて明久は美少女に背を向けた。授業中にもかかわらず、なぜ廊下にいたのか疑問に思ったところだったが、明久は気にしないことにした。

昨日一日、この学園を体験した彼にとっては些細な疑問だったのである。あれほど濃密な一日を駆け抜け、彼の知らないところで抗体ができたらしい。

靴音を鳴らして去っていく明久を呼び止めるような声はなく、少し不思議な出会いはあっさりと幕切れとなった。

至って普通のチャイムが授業終了を高らかに告げ、Fクラスの面々が次々にちゃぶ台に突っ伏す。

午前中の授業は代表である雄二が全て補充テストに回したせいでFクラスの面々に疲労が溜まったのだろ。すぐに持参した弁当や食堂に足を運ぶことなく、疲れた頭を休ませているように見えた。

「ふう……疲れたのう」

「『ねえねえ木下くん』『君裸エプロンって興味ない?』」

「……………疲れた」

「うしっ、んじゃ食堂行くか！今日は何食うかな」

「あつ、食堂行くならウチも一緒にいい？」

そんな中、続々と立ち上がって教室を後にしようとしたFクラスのメンバーが不意に呼び止められる。

「あ、あの……みなさんっ」

もじもじと舌足らずに呼び止めたのは瑞希だった。見ると、彼女の背後には大きな四角いものが白い布に包まれているのがわかる。

「おお、もしかして昨日言ってた弁当かの？」

「は、はい！迷惑じゃなければ……」

「『うわ姫路ちゃんマジで！？』『すごいや昨日とは打って変わっていいことづくしじゃん！』」

目の前に差し出された弁当は実際かなりの大きさだった。それを見た明久達がにわかに活気づく。女子の手作り弁当の効果は凄まじいものがあつた。

「おしつ、じゃあせつかくだし屋上でいただくとするか。明久達は先に行つていいぞ」

「……………雄二は？」

「ちょっと飲み物でも買ってくる。Dクラスに勝った礼も兼ねてな」

「あつ、じゃあウチも行こつか？一人じゃ大変でしょ？」

かくして、雄二と美波と別れた明久達は喜び勇んで屋上へ向かう。

特に明久は昨日受けた仕打ちのせいかとでも気分がいいようだ。

昨日も訪れた屋上のドアを開け放つ。幸い他の生徒の姿はなく、まさに貸し切り状態。天候も晴れ晴れとしたもので、埃っぽいFクラス教室とは比較するのもバカらしいほどの気持ちよさだった。

「あんまり自信はないんですけど……」

広げたシートの上で瑞希お手製の重箱の蓋を取る。その中身を目にした瞬間、一斉に歓声があがった。

「これは大したものじゃのう……」

「……………！（コクコク！）」

中はから揚げやエビフライなどが敷き詰められており、実に食欲をそそるようなラインナップが揃っていた。アスパラガスなどの彩りも良く、六人分といえど気合いを入れて食べなければ余ってしまいそうな程の量である。

この弁当一つに多大な時間と食費を費やしたはずなのに、それを誇示したりする訳でもなく瑞希は胸を撫で下ろしたように柔らかな微笑みを浮かべ、安堵の息を吐いた。姫路ちゃんマジ天使。

「『これが夢にまで見た女の子の手作り弁当かあ!』 『うわーうわー! どれにしようか迷っちゃうねえ!』」

明久が持参した割り箸（今日の昼食）を取り出し、フラフラと狙いが定まらないまま空中をさまよう。その隙を突いたつもりどうかはわからないが、康太の箸がきつね色のエビフライをかつさらうように摘み上げた。

機先を制された明久が声を上げる前に、流れるような動作で康太は弁当を口に放り込み、

パク

ガンッ!!

ガタガタガタガタガタ!!

豪快に倒れ、痙攣を起こして壊れた洗濯機状態に陥った。

「……………」

「『……………』」

思わず表情が凍り付く明久と秀吉の二人。和気あいあいとした時間がストップしたように、その顔色は穏やかなままで固められていた。一種の蠟人形と言えなくもない。

「つつ、土屋くんっ!？」

いち早く反応したのはやはりというべきか、弁当を作ってきた瑞希だった。口に合うかどうか自信がなかったのだろう、食べる様子を顔を俯かせて盗み見していたようだ。姫路ちゃんマジ女神。

「……………（ムクリ）」

と、瑞希の声に反応した、上半身だけ壊れた洗濯機状態を脱出した康太が起き上がり、

「……………（グッ）」

昨日のように親指を突き出し、すごく美味しいぞとアピールした。

「あっ、お口に合いましたか？よかったですっ」

再び安堵するように胸を撫で下ろす瑞希。ちょっと目線を下に向ければ、壊れた洗濯機状態が元気に再稼動しているのが見えるのだが、どうやら瑞希の視界には入らなかったらしい。バツチリ視界に入った明久と秀吉は安堵どころか冷や汗全開で戦慄した。

「みなさんもたくさん食べてくださいね」

嬉しい台詞をかけてくれているはずなのに身体が拒絶するという前代未聞の謎が浮上していた。

「おう、待たせたな！ほー、こりゃうまそうじゃないか」

そんな折、弁当を凝視して絶賛フリーズ中だった明久達の下に雄二が帰ってくる。買ってきた缶ジュースを抱えながらひょいっと卵焼きを摘み、康太と同じように口に持っていく。違うところといったら雄二の動きが明久達にはスローモーションに見えたことくらいだろう。走馬灯、いいえ、死亡フラグです。

パク

ゴンッ！！

ガシャガシャンッ

ガタガタガタガタガタ！！

壊れた洗濯機がまた一つ生産された。

「きゃっ！？さ、坂本！？」

遅れてやってきた美波が屋上の扉をくぐり、驚いた声を上げる。それを気にすることなく雄二は顔を明久に向けた。

「毒を……盛った、な……っ！？」

毒を盛って生まれる友情ができていた。

瑞希には聞こえないような細かい声だったので彼女が傷ついた様子はない。明久が何も言わずに弁当を凝視する様子から、毒を盛った訳ではないと悟った雄二が秀吉に助けられながら上体を起こす。

「ちょっと坂本！大丈夫なの！？」

「あ、ああ……足が、攣ってな……」

もちろんそんな訳ではない。劇毒級の弁当のせいだと言ってしまえば瑞希を傷つけることになると考えた雄二の気配りである。

それに続いて、今度は秀吉が雄二に便乗するようにフォローを入れる。

「は、はっはっは。雄二、運動不足ではないのかの？」

「そ、そうかもな……。階段を全力で上がったせいだな」

「そうなの？坂本ってなんか鍛えてるって感じがするけど？」

膝を折って腰を下ろす美波が訝しげに尋ねる。空気読めよこの野郎と思っただが、美波は瑞希の弁当の味も知らなければ食べたところの反応も見えていない。おまけに野郎でもない。

このままでは余計なことを言い出しかねないため、アイコンタクトの末、三人一致で「さっさと退場させよう」という結論に行き着いた。

「し、島田よ。お主が手を突いているところじゃが」

「うん？どうしたの、木下？」

「実は、さっきまで虫の死骸があつての」

「ええっ！？早く言つてよ！」

「……………手を洗つてくるといい」

「も……………そうする」

「島田はなかなか弁当にありつけないな」

ははははは、と笑い声が沸くその裏に、一人の尊い命が救われた。

ちなみにその裏では――

（どうすんだこれ……………本気で人が死ぬレベルだぞ……………）

（ムツツリーニ、この弁当はアウトかの？それとも……………チェンジかの？）

(…………ゲームセット)

セーフという選択肢は除外されていた。ちなみに五回裏までの野球としてもアウトカウントは全部で30にも及ぶ。バイオウエポンもびっくりの数字である。姫路ちゃんマジ悪魔。

アイコンタクトがいくつも飛び交い、緊張した空気が漂う中、不意にその膠着状態を、先ほどの会話にもアイコンタクトにも参加せず、ずっと弁当を凝視していた明久が解いた。

彼の手が動き、割り箸の先にあるものは――弁当。

(おっ、おいっ！明久！?)

雄二が必死にアイコンタクトを送るが、明久が気づくことはない。

当然である。雄二からすれば信頼の置ける友人だろうが、明久からすれば雄二も秀吉も康太も昨日初めて会ったクラスメイトだ。アイコンタクトなど明久が理解できる訳がない。友人という関係が、成り立つ訳がないのだ。

明久が取ったのは可愛らしくタコの形にあしらわれたウィンナー。箸で摘んだ明久は、先ほどの康太と雄二のリアクションを見ていたにもかかわらず、何の躊躇いもなく――食べた。

「ど、どうですか、吉井くん？」

もぐもぐと、相変わらずの笑顔のまま咀嚼する明久。その光景をその場全員の視線に曝されながら、喉を鳴らして飲み込んだ明久は率直な感想を述べた。

「『美味しくないね、コレ』」

「あ……っ」

瑞希の表情が沈んだものになっても、明久は構うことなく続ける。

「『ほら、僕って結構偏食じゃない？』『こういう酢酸とか水酸化ナトリウムとか濃硫酸とかって体が拒絶しちゃうんだよねえ』『一回濃硫酸を頭から被ったことがあるんだけどさ』『あの時は酷かったなー顔とか焼け爛れちゃったんだぜ？』『あまりの美味しさに過剰反応した土屋くんと雄二くんはともかく』『これはちょーっと僕の口には合わないな』」

「明久ッ！！」

一見自分勝手な話に聞こえるが、明久の言葉は明確に瑞希の弁当を拒絶している。明久の軽率な言動を聞いて徐々に涙ぐんでいく瑞希を見た秀吉が怒気を孕んだ声で名前を叫ぶが、その両者を無視して、

「『まあ別に』『それでも食べるんだけどねー』」

次から次へと弁当の中身を口に放り込んだ。

「あ、明久っ!？」

再び秀吉が、今度は驚愕の声で明久の名前を呼ぶ。その声に応じることもなく、明久は口いっぱいにおかずを詰め、見ていて気持ちがいまいに箸を進めていた。

「あ、あのっ! 吉井くん、お口に合わないなら食べなくても……!」

「『んぐ?』 『えーだって久しぶりのまともなお昼ご飯なんだぜ?』
『それに夢にまで見た女の子の手作り弁当!』 『それを逃すなんて
モテない僕にとってはありえないよ』」

「あ……」

瑞希の表情が沈みがちなながらも、ふっと柔らかく緩む。その間にも明久は弁当を食べ続け、とうとう全員が見ている前で一人前弱を食べ終えてから箸を置いた。

「『これ以上は食べられないかな』 『ごめんね姫路ちゃん』 『ごちそうさま。』」

「いえっ、そんな……。……。あの、明久くん」

「『……うん？』『どうしたの、姫路ちゃん？』『」

「その……。っ、また、作ってきてもいいですか……。？」

涙目の上目遣いで自分を覗き込むように見てくる瑞希。当然、明久の返答は以下のようなものだった。

「『……もちろん！』『次は僕の口に合うお弁当だと嬉しいな』」

「は……。はいっ！」

遠慮深い表情が一転、彼女らしい麗らかな春を思わせる笑顔が、その顔いっぱい広がった。

「それじゃあ片付けちゃいますね。次はもつと——明久くん？」

「『……………。』『ごめん、姫路ちゃん』『ちよつと僕の割り箸洗
つてきてくれないかな』『明日のお昼ご飯だから』」

「あ、はい。じゃあちよつと待っててくださいね」

瑞希が割り箸を受け取り、屋上を後にする。丁寧に扉が閉められたと同時に、雄二達が涙ながらに明久を褒め讃えた。

「明久……！お前って奴は……！！」

「……………よく、頑張った……………！！」

「すまぬ……………！明久よ、お主、存外立派じゃぞ……………っ！！」

一斉に称賛されながら、その全てを一身に受け止める明久は、青い顔に苦しい笑顔を浮かべ、

「『……参ったぜ』 また、惚れちゃったみたいだよ。『……ご
ふっ』」

「『明久あ——っ！』」

彼の名前がこだまする中、力尽きた。

「何かあってからでは」(前書き)

バカテスト・国語

第十四問

問 丸の中を埋めなさい。

『明○止○』

黒く塗り潰した生徒は問答無用で補習室。

姫路瑞希の答え

『明鏡止水』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『明●止○』

教師のコメント

途中で思いとどまってくれたようですねによりです。

吉井明久の答え

『第伍式最終奥義・明鏡止水!』

教師のコメント

ここまでバツをつけたくなるような回答は先生初めてです。とりあえず最終奥義なのに五番目まであるってそれ矛盾してませんか？

島田美波の答え

『第壹式最終奥義・明鏡止水!』

教師のコメント

あなたが始祖でしたか。

「何かあつてからでは」

明久が倒れた日を跨ぎ、再び翌日の昼休みが訪れる。例によって外は春一番の陽気だが、Fクラスの教室の雰囲気は少々刺々しいものだった。

それというのも、今日は昨日のような状況とはかなり異なるものである。予鈴はとうに過ぎ、本鈴が鳴り渡る頃にはBクラス戦が始まるのだ。緊張感と高揚感が教室を満たす中、教壇に立った雄二は確認の意味を含めて話を切り出した。

「さて、これからBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『『『おうつ！』『』』

「結構。今回の開戦直後の戦闘は姫路に指揮を取ってもらつつもりだ。頼んだぞ、姫路」

「が、頑張りますっ」

『『『おおーっ！』』』

一向に下がらないモチベーションが最高潮に達する。この勢いだけは他のどのクラスにも劣らない、力強い武器となるだろう。

キンコーンカーンコーン――

タイミングを見計らったようなチャイムが、さながら戦闘開始を告げる警鐘のごとく鳴り響く。

――戦争が、始まった。

「よし、行ってこい！野郎共！」

『『『サー、イエッサー！！』』』

雄二の声を受け、雄叫びを上げながらBクラスの本陣へ走るFクラス。その怒涛の勢いは、男子生徒ばかりということも相まって相手を怯ませるには十分な効果があった。

今回の戦争において、雄二の説明によるとBクラスを教室に押し込めることが重要とのこと。そのためにこの前線部隊には明久、瑞希、美波、秀吉を加えた約四十人のFクラスが投入されていた。こうして見ると明久のハーレムに見えなくもないが、そんなことを口走れ

ば周りのFクラス勢による惨事は免れないだろう。

かくして、全力疾走で廊下を駆け抜けるFクラス勢。その最後尾に、体力で劣る瑞希とやる気が劣る明久が並んで走っていた。

「あのつ、吉井、くんっ。さ、先に行つてて、構いませんからっ」

「『……………』」

「あの……吉井くん？」

「『いやいやなんでもないよ』『とりあえずごちそうさまです』『』」

「……………？今日はお弁当は作ってきてませんけど……………？」

やる気がないというよりも、瑞希が走るたびに揺れる二つのメロンが目当ての明久だった。

瑞希のスピードに合わせた結果、戦場に着いた時にはすでに戦闘が始まっていた。

どうやら戦況はFクラス側が若干有利のようだ。総合点数こそ桁が違う数字が映し出されていたが、四十人という数に対しBクラスは十人程度。それぞれが連携を組んでいることもあり、様子見のつも

りであるBクラスを見事に押していた。

「お、遅れて、すいま、せん……」

『来たぞ！姫路瑞希だ！』

瑞希の登場と同時にBクラスの目の色が変わる。口ぶりから察するに瑞希がFクラスにいることを事前に調べていたのだろう。

「Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます！」

「律子、私も手伝う！」

息を切る瑞希の前に二人の女子が立ちはだかる。一人の生徒に二人で相手をするなど、かなり瑞希を警戒しているらしい。当の本人は未だ膝に手を突いている訳だが。

「『んじゃー姫路ちゃん』『来たばっかで悪いけど、さくつとやっちゃってー』」

「は、はい。えっと、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

警戒されているにもかかわらず、その丁寧な物腰に担当教師から苦笑が漏れる。Bクラスの二人がやりづらそうに顔を見合わせるも、三人は同時にそのキーワードを口にした。

「『サモン 試獣召喚！』」

喚び声に応えたお馴染みの試験召喚獣が光の魔法陣と共に姿を現す。瑞希の召喚獣はDクラス戦と同様のものだったが、以前とは違う点に明久は気付いた。

「『ん？あれ？』 姫路ちゃんの召喚獣、腕輪なんてしてたっけ？」

「

「あ、はい。数学は出来がよかったので、腕輪をもらえたんです」

頭に『？』マークを飛ばす明久だが、Bクラスの二人にはその意味を知っていたらしい。後ずさるようにして、驚きの表情で驚きの声を上げた。

「そ、それって特殊能力の！？」

「400点オーバーなんて勝てる訳ないじゃない!」

二人によると、どうやら400点を超える点数を取ると特殊能力付きの腕輪がもらえるらしい。いつまでも少年の心を忘れないジャンプ読者の明久にとつて、『特殊能力』というワードは強烈に興味を惹かれるものだったようだ。

明久は胸を高鳴らせて勝負の行方を見守った。担当教師の長谷川先生が明久を「あなたは参戦しないんですか……」的ニュアンスの視線を送っていたが、まあどうでもいいみtaiである。

「じゃ、行きますね」

「『姫路、行きまーす!』」

「ちょ、ちよつと待つてよ!？」

「と、とにかく避けないと!」

瑞希の召喚獣が腕輪をつけている左腕を敵のほうへ向ける。たったそれだけの動作に対し、Bクラスの二人は大袈裟な程その場から飛び退いた。

その直後、瑞希の召喚獣の腕輪が光を発し、

キュボツ!!

「きゃあああ——っ!!」

「り、律子っ!」

律子と呼ばれた生徒の召喚獣へ極太の熱線が放出され、直撃した。

数学

Fクラス 姫路瑞希 412点

VS

Bクラス 岩下律子 189点

Bクラス 菊入真由美 151点

直撃した召喚獣は炎に包まれ、あっという間に黒焦げの姿になって戦死していた。対するもう一人のBクラスの生徒も瑞希の大剣で一刀両断され、二人を相手にした割になんともあっさりと勝敗が決まった。

『そ、そんなバカな！？』

『い、岩下と菊入が瞬殺だと！？』

『姫路瑞希、噂以上に危険な人物だ……！』

数秒で終わった戦闘を見たBクラスが戦慄する。西村教諭によって先程の二人が連れ去られていく中、その凄惨な光景と瑞希の戦闘力にBクラスがたじろいた。

「『や、つーか姫路ちゃん強すぎ。』 『そりゃBクラスもビビるよ』

」

「え、えっと……皆さん、頑張ってください！」

『よっしゃあああ——っ！！』

『やったるでえ——っ！！』

『姫路さんサイコオ——ッ！！』

瑞希崇拜の宗教ができそうな勢いだった。

その後も瑞希の尽力もあり、Bクラスが徐々に後退していく。しばらく戦闘に参加する必要がなさそうな明久がぼーっとしていると、不意に懐から取り出したジャンプを読み出した。もう飽きたらしい。

「これ明久っ。戦闘中に雑誌なぞ読むでない」

「『うわっ』『あー返してよ木下くん』」

「それよりワシらは教室に戻るぞい。ムッツリーニが気掛かりな情報を掴んだらしくての」

明久からジャンプを取り上げた秀吉が困ったような表情を作る。こっちが優勢なのになぜ、という顔をした明久を連れて戦線から外れた秀吉は若干複雑そうに話し始めた。

「実は、Bクラスの代表じゃが……あの、根本らしい」

「『な、なんだってー!?』『木下くん、それほんとかい?』」

「うむ、ムッツリーニが掴んだ情報なら間違いないじゃろう。雄二に何かあるとは思えんが……」

「『木下くんの言う通りだね!』『念には念をって言葉もあるくらいだし、相手があの根本くんっていうのはちょーっと心配だしねえ』」

『……で、根本って誰?』」

秀吉が吉本ばりにずっとこけた。

「知らんならさっきの会話はなんだったのじゃ!？」

「『いや、なんかそんな感じの空気だったからさ』それで、その根本くんは誰なんだい?」

本気で知らない明久に盛大なため息を吐く秀吉。とは言え知らないものは知らないのだ。頬に指を突いて首を傾げる明久に、やれやれと前置きしてから秀吉は説明した。

「根本とは卑怯者の代名詞のようなやつでの。カンニングの常連とか言う噂じゃ。他にも目的のためには手段を選ばないゆえ、どんな汚い手だって使ってくるという話じゃ」

「『あれー?』『勝つために僕を犠牲にした木下くとあんまり変わらない気がするぞー?』」

「……気のせいじゃ」

ふいつと視線を逸らす共犯者の一人だった秀吉。ぷにぷにと明久にほつぺたをつんつんされながら、咳ばらいをして話を戻した。

「と、とにかく。ワシらは教室に戻るぞい。何かあってからでは遅いからの」

「『んー』でもさあ木下くん』それなら教室だけじゃなくこっちも何かされるかもしれないってことだよな?』僕と木下くんが消えたらちよつとマズいんじゃないかな』」

「む……それもそうじゃの。なら……」

「『僕はここに残るよ』木下くんは教室の様子見てきてね』」

「それが一番じゃの。……なら、これは返しておくのじゃ」

明久に先程取り上げたジャンプを差し出す秀吉。しかし、明久が受け取っても秀吉の手はジャンプから離れない。

「『木下くん?』」

「……明久よ。細かいことと言われればそれまでのじゃが……」

うん？と首を傾げる明久に秀吉が憮然とした表情で詰め寄る。気になることがあるが言い出しにくいことのようなのだ。

「ワシを前より男扱いしてくれるのは嬉しいが……いきなり名字で呼ぶのは、ちょっと……気に入らんぞい」

「『……そう？』」

「うむ。ワシだけ……と、ムツツリー二もそうじゃったな。細かいことじゃが……明久に名字で呼ばれるのは、なんとも……その、気分がいいものではない」

ぱつとジャンプから手を離す秀吉。すると、必然的にジャンプが明久の手に渡った。

「ま、まあそれだけじゃ。ではのっ」

パラパラとジャンプのページをめくる明久から逃げるように走る秀吉。その顔が少しだけ赤みが差していたことに明久が気付くことはなかったが、不意に音を立てて雑誌を閉じ、走り去る秀吉に向かって明久は、

「『気をつけてねー！』」

『秀吉ちゃん！』

ずるびったああんっ！！と秀吉を盛大にコケさせたのだった。

「何の役にも立たない」(前書き)

バカテスト・化学

第十五問

問 アンモニアのおいを嗅ぐ時はどのようにするか答えなさい。

姫路瑞希の答え

『手で扇ぐように嗅ぐ』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

土屋康太の答え

『アンモニアの入った容器の口に鼻を近付け、一気に吸い込む』

教師のコメント

おそらく倒れます。

吉井明久の答え

『においを嗅ぐだけっていうなら』とりあえず頭から被っとけばいいんじゃないですかね』

教師のコメント

とりあえず死にます。

「何の役にも立たない」

秀吉と別れた明久は戦線に混ざる訳でもなく、壁に寄り掛かってだらだらと雑誌を読む訳でもなく、遠目から戦場を眺めていた。そうしてる内にわかってきたのだが、どうやらこの召喚獣による戦闘というものは思っていたよりさほど複雑ではないようだ。それどころか単純と言っても問題がなさそうでもある。

明久が見る限り、この召喚獣による戦闘というものは単体同士の一騎討ちにせよ、複数が入り乱れているにせよ、相手の点数を自分の点数分だけ削れるらしく、自分の点数が相手より上だったならば撃破、その分自分の点数が削れるというものだった。

その本質は単純明快、お互いが『突進』の命令しか出さないことが起因する。攻撃するにも『突進』、防御するにも『突進』、フオロ―するにも『突進』。瑞希のような武器のリーチや圧倒的な点数差による例外こそあるものの、そのせいで必ず相打ちとなり、両方の点数が削られるのだ。削られた点数は時間をかけて回復し、再び戦場に参加。その循環が崩れた時に、クラスボスクラスの代表が現れる———というのが一連の流れだろう。

自分で思考しながらも、明久は心底つまらないと心の中で愚痴った。結局はほとんど総力戦であり、所詮点数さえあればあっさりと螺子伏せることができる。三流の小説家が自分の妄想を詰め込んだようなバカげた点数を叩き出せばその時点で戦争は勝利と共に終結。まさしく点数が蹂躞する世界であり、自分にはそれができる。特殊能力の腕輪がそれを加速させ、ざっと10000点くらいあればさくつと勝てるだろう。

『点数があれば勝てる』。試召戦争を試召戦争たらしめるその基盤は、現実にはあまりに退屈であり、現代に言うクソゲーの名に相応しい代物だった。

「『だけれども。』だからこそ面白い」

その基礎理論を作り出したのはこの腐った学園だ。昨今嘆かれる学力低下に一石を投じ、学力向上を実現するためにこのようなシステムを導入したのだろう。

まずは、その基礎理論から螺子伏せる。

戦国時代の幾万の軍勢を、一人の兵士が点けた火によって一網打尽に焼き尽くすように。

最新技術の結晶の要塞を、複数のハッカー達が侵入させた電子ウイルスによって機能停止に追い込むように。

「『学年首席の率いるAクラスを、学年底辺が属するFクラスによって負かしてやるうじゃないか』」

基礎理論の柱を根本から叩き折る。

「吉井隊長！大変だ！」

明久の思考を打ち切るように彼の名前を呼ぶ声が入る。顔を上げて目に入ったのは明久のクラスメイト。Dクラス戦の涙を誘うような犠牲つぷりに、明久はなんとまあ隊長扱いにされていた。どうせなら近衛部隊の隊長をやりたいかったな！と思う明久。無論理由は『かったるいから』である。

「『どうかしたのかい？』」

「島田が人質に取られたんだ！」

そのせいで攻めあぐねている、という話らしい。秀吉の話を聞いた途端に人質だ。おそらく教室でもなんらかの細工が施されているに違いない。

「『ふーん』『あっちもなかなか知恵を絞ってくるじゃない』『上等だね。案内頼める?』」

「わかった。こつちだ!」

クラスメイトについていくと、戦争開始直後のような沸き立ちは見られず、困惑を含んだざわめきが広がっていた。どうやら人質を盾に脅迫までしているらしい。

「あ、アキ!」

人の波を掻き分けて前へ進む明久を見た美波が声を上げる。よくよく見てみると、Bクラスの男子二人に両手を後ろに回され、召喚獣は首元に剣を突き付けられている。まさに人質といった様子だった。

「止まれ!さもないと、こいつにとどめを刺して——」

「『あ、そういうのいいから。』『正直人質を取ったやつ^の末路なんて目に見えてるからさっさと済ませちゃおうよ』で、そっちの要求は？』『ちなみに僕の要求は美波ちゃんの解放と君達の戦死だけど？』」

どう考えても劣勢の状況であるはずなのに、明久のふてぶてしい要求に一瞬絶句するBクラスの二人。その二人の点数がかなり消費しているところから察するに、代表の指示ではなく自己による苦肉の判断と捉えるのが自然だろう。

「ふ……ふざけるなっ！ そんな要求、誰が通すかつ！！」

「『おやまあそりや残念』『それじゃあえーっと』『試獣召喚^{サモン}、だつたかな？』」

明久のその行動に、今度こそ戦場に立つ全員が驚愕する。

「た、隊長！？」

「おいっ！ 下手な動きをすればこいつを——」

と、そこで再び人質を取ったBクラスの声が遮られた。いや、遮られたというよりも、自分で口をつぐんだという表現のほうが確か

もしれない。

システムが展開した魔法陣から現れた召喚獣。学ランを規律正しく着込んだ明久の分身が——武器の類を、何一つ持っていないかったのである。

「お、おい。どういっつもりだ？」

「『どういっつもりも何も、見ての通りだけど？』 僕が代わりに人質になるっていう腹づもりさ」

「なっ！？何言ってるのよアキ！」

明久の召喚獣が、まるで自分の意思で動くかのごとく歩き出す。召喚獣の操作は、体が覚えているようだった。

「『元々この戦争は弱い女の子を守るっていう名目だったからね』 『その守るべき存在を補習室に送り込むだなんてこと、まったくもって本末転倒の極みだと思わないかい？』」

一歩。

「で、でも、あんたDクラス戦でも犠牲になったじゃない！それな

のに、今度は人質って……！」

また一歩。

「『おいおい美波ちゃん考えてもみろよ』『雄二くんこそカウントしなかったものの、君は貴重な戦力だぜ?』『理論的にも感情的にも僕らが入れ代わったほうが勝利に繋がるのさ』」

右足、左足と。

「お、おい！まだ人質を変えるなんて言っていないぞっ！」

足を進めて。

「『まあそういう訳でさあ』『美波ちゃんに代わって僕が人質になるよ』『煮るなり焼くなり好きにすればいいさ』『だってほら、君達には何のデメリットもないじゃない?』『僕が人質でもいいと思うんだけど』」

明久の召喚獣が早すぎずも遅すぎず、徐々に距離を詰める。そしてまた一歩足を踏み出し、とうとうBクラスの二人の召喚獣が――

……
攻撃圏内に入った、その瞬間。

「『やっぱりやーめた!』」

ゾンツッ!という音が、誰もが予期しなかった形で短く響いた。

英語 W

Bクラス 鈴木二郎 0点

Bクラス 吉田卓夫 0点

V S

Fクラス 吉井明久 100点

「『な……っ!?!』」

二人の残り少ない点数が無慈悲に刈り取られ、あえなく戦死する。

一体何が起ったのか——自分の召喚獣を確認すると、そこには顔面に突き立てられた、あまりにも巨大な螺子があった。

武器と呼ぶには甚だ不格好なものだが、顔面を凶悪なまでに刺し貫いていることからとどめを刺したのは間違いなくこの螺子であることがわかる。

つまり、明久は相手の召喚獣が攻撃圏内に入った瞬間。

手の平を返してあっさりと裏切り、懐から取り出した螺子でとどめを刺したのだ。

「『さてと。』『こんなのはまだまだ手始め中の序の口だよ。』『まあこれからの報告を期待して待っていてくれたまえBクラスくん！』」

「

近くにいた西村教諭に引きずられていくBクラスの二人に、周りに残っている他の生徒に。

「『この学園において、この戦争において』『点数』なんて何の

役にも立たないという報告が『すぐに学園全域を駆け巡ることだろっぜ。』

明久は、試召戦争たるセオリーを覆すことを宣言した。

「僕も一枚噛ませるよ」(前書き)

バカテスト・日本史

第十六問

問 明智光秀が織田信長に謀反する前に言った有名な言葉を『敵は』から繋げて答えなさい。

姫路瑞希の答え

『敵は本能寺にあり』

教師のコメント

正解です。少々難しかった気もしましたが、姫路さんには無縁の心配でしたね。

須川亮の答え

『敵はリア充にあり』

教師のコメント

明智光秀が不憫に思われますのでやめてください。

土屋康太の答え

『敵は己の中にあり』

教師のコメント

間違いではありませんが、これは土屋君の信条でしょうか？とても好ましく思います。

吉井明久の答え

『敵は敵』 『味方も怨敵』 『ホトトギス』

教師のコメント

ホトトギス殺伐としすぎでしょう。

「僕も一枚噛ませるよ」

「——そこまで！四時を過ぎたため、協定に基づきこれ以上の戦闘は一時中断となります。皆さん、今日はお疲れ様でした」

腕時計を見る教師の声が耳に入ると同時、召喚フィールドが消されたせいで召喚獣が次々と消滅していく。戦場の熱狂的な雰囲気が残る中、戦闘に明け暮れていた生徒達は一日が終わったと言わんばかりに自分達の教室へ向かってぞろぞろとけだるげに歩いていった。

あの人質騒動が過ぎた後、Fクラスの勢いは熾烈を極め、Bクラスを教室に追いやる程の戦績を上げていた。怒りがそうさせたのかはわからないが、美波を人質に取られたことでモテない男達の何かに火を点けたのは間違いないだろう。

戦場が静けさを取り戻す中、明久は聞き慣れない単語に首を傾げた。

「『んー？』 協定ってなんだろう？」 美波ちゃん知ってる？」

「ウチはわかんないけど……坂本なら知ってるんじゃない？」

Fクラスの司令官である雄二ならば知らないことはないだろう。 B

クラスの目の前からFクラスまでの長い廊下を渡り、Fクラスの教室に入る。

「おう、戻ったか明久」

「『雄二くん、協定って何さ？』 『せっかくいいところまでいったんだぜ？』」

「今話す。それより戦況を教えてくれ」

「えっと、とりあえずBクラスの中まで押し込むことはできたわよ？」

「ふむ……なるほどな。ということは明日はBクラスの前からか。よくやってくれた」

珍しく茶化さずに褒め言葉を送る雄二。満面の笑みはおろか、ニヤニヤ笑いもせずに真剣な表情で言っているのだから本心からの言葉なのだろう。ただ、明久にその表情が向けられることはなかったというだけである。つまり明久は褒めてない。

「『うわーうぜー』 『ねえねえ僕は？僕には何かないの？』」

「あ？あー……まあ……。………あ、協定のことだったな」

「『あーうん』『褒める点が見当たらなかったなんてことはどうでもいいとして』『協定について教えてほしいな』」

ずーんと壁に上半身を預けて目に見えて負のオーラを振り撒く明久。もう見てて謝りたくなるくらい卑屈になっている明久だった。もちろん雄二は何事もなかったように話し始めたが。

「協定といってもBクラスが持ち出してきてな。『四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』ってな」

「『ふーん』『でもウチとしては体力勝負に出たほうがぶつちやけ有利じゃないの？』」

「姫路以外は、な」

「『あー姫路ちゃんね』『まあそれもそっか』『じゃ、今日のはさっさと帰っていいってこと？』」

「そうだな……ん？どうした、ムツツリーニ？」

ゆらりと脱力感全開で身を起こす明久の傍らにいた、いつからいたのかわからない康太が雄二の肩を叩く。さすがは隠密行動に長けていることはあり、声が聞こえるまで誰もその存在に気付くことはなかった。それはそれで傷つくものなのかもしれない。極論として『え、お前いたの?』と言われているようなものである。相当精神ダメージが高い。

「……………Cクラスが試召戦争の準備をしていた」

「Cクラスが、か?…………なるほど、漁夫の利を狙うつもりか」

この戦争の軍配がどちらにあがろうと、終結した時は必ず相応に疲弊しているはずだ。その隙を突こうということだろう。

「坂本、どうするの?」

「んーそうだなー。時間もあることだし、Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞとも言っとけば攻め込む気も失せるだろ」

「…………クラス単位で犠牲にするって…………」

犠牲の二文字に定評があるFクラスだった。

「しかし……俺も合わせて四人か。姫路はほしいし、それと……」

「はい？坂本くん、呼びましたか？」

雄二の声に呼ばれたようなタイミングで教室に戻ってきた瑞希。少々息が切れている辺り、やはり彼女にとって耐久戦には不向きなようだ。

「ああ、ちょっとCクラスまでついてきてくれるか？あとは……まあ須川でいいか」

かくして、瑞希と須川が加わった六人でCクラスへ向かうこととなった。下校するにはまだ少し早い時間で、一行の他に生徒らしき人物は見当たらない。六人分の足音が廊下に響く中、特筆することもなくCクラスに辿り着いた。

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何かしら？」

雄二の少し不遜な態度で出てきたのは気の強そうな女子だった。名前は小山友香。自称Ｃクラスの代表は、腰に手を当てて少々高圧的な物言いに対応してきた。

「交渉に来た。Ｃクラスと不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約？ふうん……」

「うっわぁ……。何かすげえ偉そうな感じだな……」

「……………あれはちょっと、ない」

「『ええ？それがいいんじゃないか』その強気な性根がヘシ折れるところは結構見物だぜ？」

「なるほど、一理あるな」

「……………明久も須川もわかってない。活発かつ軽快なスポーツ系女子こそが神」

「何い？それは聞き捨てならんぞムツツリーニ！」

「『そうだそうだー！』『裸エプロンこそ正義だー！』」

後ろのギャラリーが若干どこるかすこぶるやかましいが、小山友香は大して気にした様子もなく前髪を掻き上げる。はつきりとした返事をしないまま口元を歪め、いやらしい笑みを浮かべるや否や、背後に振り返った。

「どうしようかしら、根本くん？」

Cクラス。その教室は上位の指に入るように、一般の教室よりもそこそこ広い。

故に、バカ話をする明久須川康太を抜くとして、雄二達が奥にいる人物に気付かなかったのも、無理はなかった。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「な……っ！根本！？」

Bクラス代表、根本恭二。卑怯者と名高い、今現在Fクラスが戦争を仕掛けている敵の総大将がそこにいた。

当然、代表が単身という訳もなく、周りには七、八人のBクラスらしき生徒が取り巻いていた。全員が一樣にこちらを見る目は、代表含めていかにもバカにしたようなもの。意地の悪い笑みを浮かべ、まるで畏にかかった獲物を見ているかのような、そんな表情。

「ひどいじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて」

「な、何言ってるのよ！ウチらはただ――！」

「先に協定を破ったのはそっちだからな？これはお互い様、だよな！」

取り巻きが明久達を取り囲み、その後ろからひよっこりと教師のスイツ姿が現れる。これで戦闘の条件は整ってしまった。

「長谷川先生！Bクラス芳野がFクラス代表に、」

「させるかつ！Fクラス須川が受けて立つ！」

数学

Bクラス 芳野孝之 161点

V S

Fクラス 須川亮 41点

圧倒的な点数差が映し出される。こちらには瑞希がいるとはいえ、数学は先程の戦闘で消費してしまっていた。囲まれているという状況が明久達の不利を加速させ、すぐに雄二の首が討ち取られてしまうだろう。

生き残る手段はただ一つ。

「くっ！ここは逃げるぞ！」

逃走の外ないだろう。

だが、雄二が撤退の指示を出したにもかかわらず、明久は走る気配すらなく、その場を動かなかった。

「明久！早くしろっ！このままじゃやられるぞ！」

「『まあまあ雄二くん。少しは落ち着けよ』『そんなにエクスクラメーションマーク使ったら僕の分がなくなっちゃうじゃないか』」

さもこの状況を楽しんでいるような笑みのまま、そんなことを言っ

てのける明久。

「アキ！バカなこと言っていないで早く逃げるのよ！」

「『逃げるだつて？』 『まったく何を言ってるんだか』 『美波ちゃんはこの状況がわかってないのかい？』」

やれやれと肩を竦める明久にその場全員の視線が集中する。明久のその不可解な行動と言動に、召喚を行った須川とBクラスの生徒も召喚獣の操作を中断していた。

「『いいかい？』 『あちらの代表である根本くんが率先してお互い様だと言ってくれてるんだぜ？』 『つまりそれは両方共悪いから両方共悪くないってことなのさ』 『雄二くんは謝罪しなければならなかったところをBクラスの代表様が帳消しにして』 『しかも直々に出向いてくれてるんじゃないか』」

明久が両手を持ち上げる。その手には先程まではなかったはずの、彼の性格を如実に語った武器らしからぬ武器が握られていた。

「『それなら今ここでご期待通りさつさと螺子伏せちまおうぜ。』
『明日の九時？』『そんなの待ち遠しくて夜も眠れないよ』『お預
けを食らうのもいい加減飽き飽きしてきたんだよねえ』」

『『『な……っ！』』』

螺子。しかし、螺子と呼ぶにはあまりにも巨大な代物。

大きな故にはつきりと目視できるそのフォルムは狂おしい程に禍禍
しい。螺旋を描く刃の果てにあるものは刺々しさが際立つ三角錐。
本来の用途から掛け離れた螺子の頭の部分をわし掴みにする明久は、
彼の醸し出す凶悪な雰囲気も相まって、さながら大鎌を振りかざす
死神を連想させた。

『『『ひ……っ！？』』』

殺気とも解釈できる、粘つくような感覚の気味の悪い空気に当てら
れた全員が後ずさる。その空気を向けられているBクラスとしては

たまったものではないだろう。

「……………明久、何をするつもりだ……………！」

「『何をするつもりってさっきも言ったじゃない』 要は根本くんが降参したくなるようにすればいいんでしょ？」

そうすれば、自分は勝てる。

「う、うわっ……………うわぁっ！」

「よ、吉井くんっ！そんなのダメですっ！…！」

瑞希の制止も聞こえないかのように無視し、ゆっくりと歩き出す明久。

「ま……………待ちなさい吉井君！！召喚者への攻撃は規則違反ですよ……………！」

「『へえ？そんなんですか』 だったら攻撃する前に降参してくれ
ると嬉しいなあ』」

教師の警告もまるで取り合わず、止まる気配すら見せない。

説得は不可能か——そう思ったのも直後、思いの外あっさりと明久は引き下がることとなった。

「よせ、明久。この学園で刃傷沙汰は相当まずいぞ」

「ほえ？」『どうしてだい雄二くん？』

「ここは試験校だ。世間の注目を浴びてるとなれば、些細な不祥事でも大きく騒ぎ立てられる可能性が高い。だから、」

「……なるほどね」『せっかく盛り上がってきたのにまた廃校にするのは忍びないなあ』

スツと手を下ろす明久。それと同時に空気が弛緩するが、突然の気の変わりにBクラスは未だ緊張状態にあるようだった。

「『あははっ！』『ねえねえ根本くん床になんて座ってどーうしたのー！？』『なんならいい床紹介してあげよっか？』『廊下の床は冷たくてへばり付けば気持ちいいと思うぜ？』」

「なっ……ふざけやがって！！おいつ！所詮ハッターだ！坂本の首を討ち取れっ！！」

根本の一喝でBクラスが再び動き出す。

「くっ、行かせるか！吉井！早く行けっ！！」

Bクラスの前に立ち塞がる須川。自ら時間稼ぎになるつもりなのだろう。

須川の言葉を受け、明久を最後にCクラスの教室から離脱する。その途中、教室の扉を閉めるなり明久は、

「『まあ別に』『これくらいならいいよ……ねっ！』」

ズガンッ！！と手に持った螺子の倍以上の本数で扉を歪めた。螺子が床に食い込んでいる辺り、ちょっとやさそつとじゃ開きそうにない。

『く、くそ……！！覚えてろっ！！』

明久達が走るその背後から聞こえてきた声は、廊下を響かせて徐々に小さくなり、やがて消えていった。

「おい明久。正直に答えろよ」

夕焼けの眩しい道路沿い。学校での一日を終えた明久と雄二は一緒に帰路についていた。

「お前に一体何があったんだ？」

「『……………』」

質問を投げ掛ける雄二の表情は至って真剣味を帯びたものだ。明久は何も答えないまま、雄二の質問を聞いていた。

勘違いのないように言っておくと、二人の間に重苦しい空気が漂っているという訳ではない。雄二の口調も、台詞の割に『今日お前何食った？』といったような軽々しいものだ。

「春休み……は時々遊んだから違うよな。いつからかはわからんが、明久、お前最近変だぞ？」

「『んーそうだなあ』『じゃあ僕が雄二くんの質問を答えたら僕の質問も答えてね』」

「質問？なんだ？」

「『それはあとにとつとくよ』『で、僕に何があつたつて質問だつたっけ？』」

雄二が首肯する。

「『まあ簡単な話さ』『ただの漫画の影響だよ』『それ以上でもそれ以下でもない』『たつたそれだけの話さ。』」

「……そりや答えてないのと一緒にだろうが」

やれやれとため息を吐く雄二。それが明久には意外だった。

なにしろ、明久は雄二がもっと突っ込んで聞いてくるだろうと思っていたのだ。思いの外簡単に引き下がる雄二に、内心明久は首を傾

げていた。

雄二自身も、明久のことは本当に気にしていなかった。理由などひどく簡潔なものだ。

「ま、バカってところは変わってないけどな」

「『……………』」

その雄二の言葉の真意を、明久が理解することは到底不可能だった。その言葉に、いろいろな思いが詰まっていることも。

バカってところは変わってない——それはつまり、球磨川楔と吉井明久の『バカ』な部分がひどく酷似していることを意味する。

球磨川楔は、か弱い女の子のために身を呈して守り抜き、その生涯を終えた。

吉井明久は、いつだって他人のことを思いやり、痛い目にも遭いながら生きて来た。

そういう――『他人のためにバカを見れる奴』というところは変わらないと、雄二は明久のちゃぶ台の上での演説を聞いて感じ取ったのだ。

――『ただ、か弱き者を守るために！』――

「『……まあいいや』 それじゃ僕からの質問だけど」 「なんで雄二くんはAクラスなんかには戦争を仕向けたのかな？」 「本当に設備が目的なのかい？」 「」

「ん……そのことか。まあ……単純な話だ。世の中勉強が全てじゃないってことを証明したくて、な」

「『ふーん』 『かつこいいね、そういうの』 「」

鞆を肩に担ぎ、いつしか見せたような遠い目をする雄二。その様子を見た明久がそれ以上を口にすることはなかったが、雄二と別れるY字路に来て、唐突に口を開いた。

「『それに、僕の目的と被ってる部分もあるしね』『僕も一枚噛ませるよ』」

明久の目的。それは、確かに雄二の目的と重なっている部分もあるだろう。

片一方は文月学園で、試召戦争で、点数など役に立たないという証明。もう一方は世の中勉強だけが全てではないという証明。

「当然だ。お前はボロボロになるまで使い倒すつもりだからな」

「『うつわ性格わるうー』『CMのエネゴリくんだってもうちょっと優しいぜエフゴリくん』」

のちに、文月学園を駆け巡る最低最悪コンビの利害が一致した、まさにその瞬間だった。

「……………？」

同時刻。夕日が差し込むFクラスの教室で、ただ一人鞆の中を漁っている生徒がいた。

ふわりと柔らかかそうな桜色の髪に人当たりのよさそうな見るものを癒す顔、自己主張の強い胸。

姫路瑞希。

「……………ない……………」

必死に鞆を漁る瑞希。しかし、目的のものはなかったのか、ひどく焦った様子で辺りを探し回る。

「そんな、どうして……あの、手紙には……っ！」

瑞希の挙動不審は夕日が沈むまで続き、帰路につく瑞希の表情は夜の闇に負けないくらいに暗いものだった。

捏造瀑働

点々と並ぶ道路脇に設置された街灯が暗い夜道を照らしていた。

見上げた空に、学校で習ったようなキラキラした星はない。テレビのニュースで連日報道されている環境問題が空を覆い、視覚から星を隠す。柔らかく降り注ぐ月明かりも、広大すぎる暗闇の空を照らす唯一の光源とくれば、どこかもの寂しい印象を受けた。

それがまた、瑞希の不安を煽る。小学生にとって帰宅するにはあまりに遅い時間帯。明かりがなければ何も見えない夜を好む小学生などほとんどいないだろう。大抵が怖がり、不安が募るはずだ。瑞希もまた同様に、小さな物音に体を強張らせ、街灯の下に到着しては胸を撫で下ろすということを繰り返していた。

しかし、瑞希の恐怖心を占める割合の内、夜の闇はごく一部のものだった。その大部分を占める割合の原因は、放課後の出来事に直結する。

圧倒的な血。

凄惨すぎる光景。

理解できない友達。^{明久}

その全てが、瑞希の幼い心に大打撃を与えていた。まだ充分に発達していない彼女の心が先程目にした情景を必死に処理し、不安定な状態に至らせる。

目まぐるしく頭の中を飛び交う疑問の数々を知りたいとは思わない。あの構図が頭に思い浮かぶたび脳が警鐘を鳴らし、それ以上の思考を無理矢理に遮断させる。子供ながらに本能が危険を感じ取っているのだろ。あの惨劇に至った経緯、同級生のその後、惨状の後始末。次から次へと流れるように疑問が消滅されていく中、たった一つ瑞希の中で消えずに残った疑問があった。

明久。

彼は、どうしてあんなことをしたんだろう？どうして友達を傷つけることができるんだろう？どうしてあんな状況下で笑っていられるんだろう？

彼の本心が知りたい。本音が聞きたい。本意を探りたい。

「明久くん……」

その疑問に、彼女の本能が警鐘を鳴らすことはなかった。

次の日の朝。両親にこっぴどく叱られた瑞希は足取り重く通学路を歩いていった。叱られたといっても、怒りをぶつけるようなものではなく彼女の身を心配するような叱り方だった。事実、二人には心配させてしまったのだらう。

母親が少々（もしかすると父親も）特殊な人だが、自分に笑いかけてくれる母親が瑞希は大好きだ。自分の頭を撫でってくれる父親が大好きだ。それ故に心配させてしまつて申し訳ない気持ちだし、イジメられていることが発覚して失望されるのが怖かった。

しかし、瑞希は昨日の体験から思う。

「お母さんとお父さんは……ほんとはどう思ってるんだらう……？」

明久は言った。『僕の友達を盗らないで』と。

友達ならばどうして攻撃したのか。瑞希の思い描く友達の定義とは、仲が良くて一緒に居て楽しい人、くらいのものだ。それなのに、明

久が何を思っ て友達と呼ぶクラスメイトを攻撃したのか、瑞希にはわからない。

一人が歪んで見えると、他のみんなも歪んで見えた。

母親は自分を優しく抱き締めてくれる。でも心の中では面倒臭がっているかもしれない。

父親は自分と楽しく遊んでくれる。でも頭の中では毒づいているかもしれない。

瑞希はそう思われているかもしれない、ということを知りたたりはしなかった。自分はともかく、明久の考えていることが知りたかったのだ。

——ただ、わからない。理解するにはあまりに非常識で、不可解で——
——^{マイナス}過負荷だった。大体、どうして自分がここまで明久のことを知りたいと思ったのかすらわからない。

瑞希は才女だ。その頭角は小学生の頃からすでに現れており、最近よく耳にする『神童』程ではないにせよ、瑞希のクラスではズバ抜けて頭が良い。もしかすると、『わからないことはわからないままにしておきたい』という天才故の簡単な理由なのかもしれないが、それすらも瑞希にはわからない。

「はあ……」

まさしくわからないことだらけである。昨日とはまた違ったため息を吐きながら入った教室は、

『「おはよう、瑞希ちゃん」』

いつもの日常が広がっていた。

キィ、と錆び付いた金属が擦れる音を、瑞希は自分が揺らすブランコの音と気付かずにはんやりと聞いていた。

今日の学校での一日は呆気ない程何事もなく終了した。瑞希がイジメられることもなく、クラスメイトの明久への反応もなく、明久は誰にでも親しげに話しかけていた。まだ日の高い時間帯、赤いランドセルを背負ってこの公園に到着するまで、文字通り何も起こらなかった。

昨日の出来事が、まるで夢であると言わんばかりに。

いくら天才的な知性を持つ瑞希といえど、昨日串刺しにされたクラスメイトの怪我の大きさは想像もつかない。瑞希がああ惨状を見て思ったことは、大量の血がピクリとも動かないクラスメイトの体から流れているということと、その中央に立つ全身に血を浴びた明久がいたということだけ。

それだけあれば状況を理解するのは簡単だった。しかし、あれほどの怪我を負っておいてクラスメイトは全員が登校した。痛みに呻くこともなかった。それどころか、この風景であるのが当然だと思わせる程、いつも通りの学校生活を送っていた。

「わかんない……」

『何がわからないのじゃ?』

隣から返ってきた声にはつとしながらそちらに振り向く。どうやら隣に人が来たことも気付かないくらい考え事に夢中になっていたらしい。

隣のブランコではとても可愛らしい同世代の女の子が勢いよく漕いでいた。それに合わせてたなびくスカートがより一層可愛らしさを引き上げている。

『随分と悩んでおったようじゃからのう。つい声をかけてしまったのじゃ。迷惑じゃったかの?』

「う、うつん。そんなことない、よ」

妙な言葉遣いだなあと思うと同時に、瑞希の直感がはっきりと告げた。

この子は、明久に通じる何かがある、と。

にここにこと笑うその表情はまさしく明久のものと同じだ。
見ているだけで近くにいるだけで、身の毛もよだつような気味の悪い感覚。その感覚は瑞希にとって無縁のものだったが、他の人間にしてみれば関わりたくない存在だろう。

過^{マイナス}負荷。しかし、瑞希は距離を置くようなことはしなかった。

なにより、イジメられて友達のいない自分に声をかけてくれて、瑞希は嬉しく思っていた。

『ふむ。ワシに話してみんかの？』

「う、うん。実は――」

瑞希の話をブランコに乗りながら聞く女の子。つつかえつつかえになりながらも、瑞希は明久のことを話した。

一通り聞き終えた女の子は笑みをより深いものにしながら、ブランコから降り立った。

『ふふ、熱々じゃのう』

「あ、熱々？」

『お主はその明久という男子に好意を寄せておるのじゃろう？故にその男子のことを知りたい。違うかの？』

好意を寄せている……のだろうか。確かに知りたいとは思っているが、それが好意とは限らない。血に濡れた明久を見て心臓は高鳴ったが、誰がどう見てもそれは――

『吊橋効果。じゃが、人を好きになることに理由などいらぬ』

ブランコから降りた女の子が手を差し出す。友達である証の握手とも、瑞希を立たせる手助けとも解釈できるその手を握った瞬間。

『そして、^{マイナス}ワシらに理由など必要ない』

目の前の女の子が猛烈に冷たい空気を発し、握った手を通して瑞希を、公園一帯を包んだ。

しかし、瑞希が気にした様子はない。少し寒くなったかな、くらいにしか思っていないだろう。

『直にその者の本音とやらも聴こえてくるじやろう。応援させてもらうぞい。お主とその明久とやらの仲をの』

その場所だけ重力が増したかと思う程、二人を中心として重苦しい空気が吹き荒れる。狂おしいまでの殺傷的な風が公園を包み込み、太陽が赤みを帯び始める。

二人の影が細長く落ちる中、

『それこそが、ワシの持つ数少ない劣等じまんであり、欠陥さいのつであり、たった一つの過負荷マイナスじゃからのう』

目の前の女の子は、思わず見惚れる程に愛くるしい笑みを浮かべた。

そのまた翌日の放課後。瑞希は明久が血まみれにしたはずだった例の場所に明久を呼び出した。クラスメイトの視線が少し気になったが、そんなことよりも明久のこのほうが何倍も気になるのだ。

今日も相変わらずな一日だった。自分はいつも通りからかわれ、明久はいつも通りクラスメイトにも先生にも恐れられた。そこにあるはずのない現実が、そこにはあった。

目の前でいつも通りの笑顔で佇む明久に、瑞希は問うた。質問の内

容は至つて簡単、『なぜあんなことをしたのか』。

瑞希に殺人の経験はもちろんない。それどころか、人を傷つけたことだつてないかもしれない。いつだつて人畜無害で、誰にだつて温厚柔和な彼女には、新聞の一面を飾つてもおかしくないような惨劇を引き起こした明久がわからない。何を考えてあの行為に至つたのか、皆目見当もつかない。

だから、聞いた。

『「あんなこと？」」「あーあのまるで夢みたいだったことね！」「そんなの簡単さ」「僕がされて嬉しいことをみんなにしてあげただけだよ」』

嘘だ、と思つた。

いや、たとえそれが本心だとしても、そのことを確かめる手段がない。

饒舌にまくし立てる明久の口から出てくる言葉の数々は全てが軽薄だつた。中身の全くない、空っぽの言葉。とても信じるに値するものではない。

涙がこぼれた。

何の涙かはわからない。明久に対する悲しさかもしれないし、理解できないことへの悔しさとも考えられるし、信じることができない自分への怒りということもあるし、その全ての可能性だつてある。

理由もわからず、ただ涙が溢れた。

必死に拭つても涙が止まることはない。やがて、涙に反応した口が
嗚咽の代わりに、

「『だって夢なら何をしたらって許されるよねえ』」

明久の本音が漏れた。

明久の言葉が途切れる。しかし、固まった表情のまま沈黙する明久
を置いて、瑞希は先程とは別の涙を流していた。

——ああ、これが、本心か。

——これが、みんなが内に秘める本意か。

——明久くんの、知られざる本音か。

「ふ、ふふ。ふふふふふふふふふふふふふふふッ。やつとだね。やつと、明久くんの、本音が、聴けたね」

——なんてくだらないものなんだろう。
マイナス

『「……これは驚いたな」「すごいよ瑞希ちゃん」「今の君は間違
マイナスいなく僕と同類だ」』

瑞希の口から漏れたにもかかわらず、それは確かに明久の声だった。
明久の声で、明久の本音だった。

口調、音程、リズム、その全てが明久のものと同じ。見紛うことな
く瑞希の口から聴こえてきたのに、その中身は明久のもの。

『「改めてよろしく、瑞希ちゃん」「これで君の将来は約束された」
はたん』

』

「明久くん……」

明久が手を伸ばす。誰が見ようとその先には地獄しか待っていない
ように思えても、瑞希にだけはたった一つの居場所に見えた。

手を握る。

『「心から歓迎するよ」
「心から歓迎するよ」』

姫路瑞希。

この話は、仮に彼女が吉井明久に触発されて同じ最低の一面を飾つたら、という熱愛報道を載せたものである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250y/>

『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

2011年12月16日18時24分発行